



第三回 書肆つづらや店主 原智子さん（インタビューシリーズ：歴史研究の隣人たち）

原, 智子
松本, 充弘 [司会]
市沢, 哲
井上, 舞
古市, 晃

(Citation)

Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 14:64-96

(Issue Date)

2022-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLDOI)

<https://doi.org/10.24546/0100481743>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100481743>



はじめに

松本 私たちの地域連携センターではさまざまな古書店さんを通じて、兵庫県下のものを中心とした歴史資料を購入することがあります。近年、原さんの営む「書肆つづらや」さんから数度にわたって史料を購入する機会がありました。その際、原さんが手がけられた目録の精緻さに、私も一同感嘆しました。また、出品されている史料も幕府や藩の職掌記録から都市や農村の家文書、あるいは国文学関係の史料に至るまで多岐にわたっており、かつ興味深いものが含まれています。この点に関しても、センター内で関心が高まりました。

年報の『LINK』では、歴史研究者以外の方々が歴史や歴史資料にどのような形で関わっていらっしゃるのか、当事者の方々との対話を通じて相互理解を深めるという企画を続けています。原さんには現在のお仕事に携わるまでの経緯を振り返っていただきながら、古書や歴史資料に対してどのように向き合っているのか、史料所蔵者や研究者に対してどういう思いをお持ちになっているのかについて伺っていきたいと考えています。

私たちは歴史資料を調査して目録をつくった

り、その写真を撮ったりといったことは普段からしてきているのですが、古書店の方が史料をどのように仕入れて整理し、販売されているのかということについては、実は思いを致してこなかったのではないかと感じています。そうしたことについても、認識を深めたいと考えています。遠方からお越しいただいた原さんに対して、深く感謝申し上げます。

原 今回の件、お話しをいただいた時には古書業者として経験の浅い私が皆様のインタビューを受けるのは荷が重い、古書業界のことを的確にお伝えするのは到底無理だと感じました。ですがお送りくださった年報『LINK』を拝読してみると多くの記事はとても興味深い内容で、殊に一一号の「家じまいアドバイザー」屋宜明彦さんへのインタビューを読んで、なぜ私にお声をかけてくださったのか少し理解できました。私でお役に立てますかどうかわかりませんが、現状についてお話しできることは全部しゃべって帰る覚悟で来ました。よろしくお願いいたします。

「阜月まつり」での

ファーストコンタクト

松本 まず、原さんが古書店を開業されたきっかけについて伺いたいと思います。

原 私が営む書肆つづらやは、日本の一七世紀から一九世紀にかけての筆写史料に注力する目録販売の古書店です。その呼称が適切かどうか迷うところではありますが「近世史料」を小店の専門分野と称してきました。専門分野とは扱う品物の主たる守備範囲を指し、それがその古本屋の「目」と最も相性のよい対象ということになります。目が合ったのが江戸時代の文書史料だったから、それがうちの専門分野になりました。「目が合う」感覚は、古本屋側の理屈では品物を見出すセンスにつながっています。でも目が合うだけでは仕入れて来た品物を理解することも値段をつけることもできませんから、そうした品物に対して責任を果たすために勉強します。私は学問として史料と向き合った経験はありません。昔々某大学文学部日本文学科に在籍したものの中退しましたので、この仕事を通じて目下手探りで一から諸々学び直している次第です。もちろん古本屋にもいろいろありまして、研究者から転身された方や、商いとご研究を両立させておられる方も現にいらつしやいますし、代々続くご家業を継いだ方たちにはまた別のスタンスもあるでしょう。ですが私は「目が合う」感覚を振り出しとして、今もそれがすべてのモチベーションとなっている類の古本屋です。それもまた多様な古本屋の類型のひとつ

であるご理解ください。

とは申しまして最初からそのような古本屋を目指したわけではありませんでした。

古本屋開業を思いついたのは、二〇〇二年正月元旦に京都で開いている本屋を探し回った時でした。子供のころから考えごととは本屋です。その日の私にはどうしても本屋が必要でした。元旦ですから目当ての本屋はどこも閉まっていた、とにかく開いている店を探して京都市街を東西南北歩き回り、時々初詣の人ごみに飲み込まれながら足を棒にして探し回った末、やつとのことで一軒の開いている古書店を見つけた。こじんまりした清潔で暖かい店内に入ると、どうやら日本で年を越したと思しき留学生さんたち数人が棚前で本を手を取っていて、お帳場らしき一角では帽子から靴までアイボリー一色で統一した装いの店員さんがニコニコと店番をしておられました。飛び込んだその店はいわゆるインディペンデント書店というものらしく、棚を見渡すと美術古書や画集、洋書や雑貨がセンスよく並んでいました。あの日私が欲していた向きの本は配架しておられませんでした。もはやそんなことはどうでもよくなつたといえますか、とにかくお店を開けて下さつていて、あんなふうに心が浮き立つカラフルな棚を回遊させてもらえただけで感謝、感謝でした。

た。掌に乗るほどの小さな美しい本を一冊買い求めてスッキリした心持ちでお店を後にすると、足早に八条口へ向かいながら「そうか、元旦に開いている本屋がないなら、そういう店を自分で始めてしまえばいいんだ」と思いました。それがきっかけです。小売経験もなく資金的な見通しもたたないのに後先考えず、どうかしてますよね。

言うまでもないことですが、この時点では現在小店が扱っているような古文書や武士の職掌記録などが意識にのぼることはありませんでした。古典籍に対しては漠然とした敬意を抱いてましたけど、それはあくまでも和本や卷子に美しく仕立てられた姿であつて、石高を列挙した文書やびつしりとクセのある文字で埋まった帳面はイメージにありませんでした。そういう品物に初めて本当に出会つたのは、開業した翌年、ようやく古書組合に加入して業者向けの市場に出入り出来るようになった後です。

二〇〇七年九月に開業、明けて正月に東京都古書籍商業協同組合に無事加入して、念願かない待望の古書市場に出入りできるようになりました。市場つて、正式には「古書交換会」といいます。全国の古書組合加盟業者だけが出入りを許される競り市です。仕入れた古書のうち自分の店では扱わないものを出品したり、反対

によそが出品したものの中から自分の店で扱いたいものに入札したりする業者市場で、神田小川町にある地上八階地下一階の東京古書会館ではほぼ毎日なんらかの専門市場が開催されています。品物に添えられた封筒に値段を複数書いた札を折りたたんで入れる入札方式で、運営形態としては、会場全体に並べた品物を開札時刻までの限られた時間内に参加古書業者が見分して札を入れて回る「置き入札」と、参加古書業者が机の前に着席してお盆に載せるなどして廻ってくる品物に入札する「廻し入札」の二種類があります。これらとは別に、振り手のハナ声を合図に参加古書店どうしが値段を発声して競り合う「振り」という方式も併用されています。ちなみに神田以外でも五反田の南部古書会館と板橋の北部古書会館の市場で毎週「振り市」が開催されています。規模としては神田古書会館がダントツです。大体一〇〇坪ほどある一フロアに――何フロア分かはその日の出品量によつて違いますけれども――全国の組合加盟店から送られてきた出品古書が並べられます。

松本 ブースがあるのですか。

原 ブースはありません。会場じゅうに並べた何十台もの頑丈な大台の上に、一斉にダーツと隙間なく並べます。貴重書は一点ずつ封筒付で平置き、それ以外は複数冊を平紐で一縛つて封



原智子さん

上つてきて、あるいは地下へ降りてきてその会場をひよいとのぞいた時、いろいろな品物が部屋じゅうを埋め尽くして広がっている様子が目に飛び込んできます。なかなか壮観です。

一同（驚きの声）

原 私 が現在扱っているような品物にはじめて出会ったのは、そういう光景に驚き引き寄せられてのことでした。

筒を付けます。一般書や學術書は一括で縛った本の背を全部正面に向けて三段、四段、時には五段、一〇段と床から積み上げられることもあります。出品物は本だけではありません。広い壁面には移動式のフックが設置されているので額・幅はできる限り壁にかけます。錦絵や武将文書などの一枚ものは台上に平置き、地方文書や藩政文書といった一括ものは荷主の箱のまま蓋を開いて台上に設置します。茶碗、看板、墨など割れ物は壁際の台に並べます。会場の大台はすべて同じ高さなので、古書会館の階段を

毎週火曜日に開催されている古典籍専門の市場で、しかもちょうどその日は「皐月まつり」といって普段より大きな規模の市場の日でした。火曜日は市場に行く日じゃなかったんですけど、その日はたまたま古書会館の六階事務室に用事があつて、ついでに階下の市場をちょつと覗いてみたら、驚いたことに和本、文書、錦絵、卷子、古文書等々で埋め尽くされた一〇〇坪が目の前に広がって…。皐月まつりには普段はこの市場に來ない業者も大勢來ていたので、その賑わいに紛れこむように会場に入つて、門外漢の

私には触れるのも躊躇われるような美しい和本をただただ眺めて歩くうち、目の端になんだかちよつと趣の異なる冊子状のものが引つかつてきて、そのまま通り過ぎようすると「いやちよつと待てよ」とばかりに唐突に襟首をグツと掴まれたような感覚に襲われました。振り返ると、そこには虫食いだらけで手垢にまみれた表紙の端がよれたように傷んだ分厚い帳面が平積みで二冊だったか三冊だったか。表紙に日記と書きつけてあるので恐る恐るページを開くと、どこもかしこもなんだか癖の強い字でびつしりと埋め尽くされており、まだ崩し字が読めなかった私には為すすべもなく、妙に後ろ髪引かれる思いをやりすごしながらページを閉じてそつとその冊子の前を立ち去りました。二〇〇八年五月のことで、私にとつてあれが「近世史料」とのファーストコンタクトだったと思います。といっても、その時の私には「史料」という認識はなく、「商品」と捉える自覚もなく、どういう立場の人の手になる日記だったか知る術さえありませんでした。にもかかわらず、ただそこにある「モノ」としての迫力でもって通り過ぎようとする私を強引に引き止めた最初の品物でした。

松本 それは、例えば博物館とかでケースの中に入っているのを見るとはまた違ったというこ

とですか。

原 全然違います。博物館に展示する史料は既
にきれいに補修してあることが多くて、それを
一点ごとに丁寧に広げて「さあここを見てくだ
さい」「こう見るのですよ」って親切に教えて
くれているから、こちらはその文脈に心を委ね
て安心して見ることが出来ます。でも市場で出
会う史料は、無防備に潔くまるごとドカンとそ
こに置かれていて、通りすがりに（その史料と）
目が合ったらつかまって、むしろこちらのほう
が史料から品定めされているような息苦しい緊
張感に耐えながら、自分の手でページを繰って
いくんです。いまは私、崩し字を読めないこと
はないんですけど、それでも市場で最初にこれ
という史料に出くわしたときには、最初は敢え
て読まないようにしています。二巡、三巡で札
を入れようという段には基本情報を得るために
読みますが、それでも読みすぎてしまわないよ
うに気を付けます。読みすぎて自分の未熟な知
識が影響した先入観に囚われてしまう前に、紙
に触れた感触をたしかめて、仕立て様を裏側ま
で眺めわたして、ページの間に残るほのかな匂
いを嗅ぎわけたり、筆跡の変化を確認したり、
筆勢の揺らぎを追ったり、そういう感覚に直に
訴えてくるものに神経を集中するようにしてい
ます。実見できる時間が限られていますし、出

会いがしらはそっちのほうが確かですから。博
物館の展示物とは、そういう出会い方はできま
せん。

皐月まつりのファーストコンタクト、あの理
解不能で奇妙な感覚がどうしても忘れられなく
て、「見るだけでなんにもできないのになあ……」
とか、「自分で売れない品物を拝みに行くほど
暇じゃないのになあ……」とか、われながら後ろ
めたく思いながらもつついっ火曜の市場に出か
けて行つて、とうとう毎週通うようになりまし
た。

古本販売からの出発

松本 すると、書店として扱おうと考えておら
れたのは、古本であつて古文書ではなかったの
ですか。

原 そのとおりです。開業準備中は「ネット販
売先行後に実店舗を併設、古本と新刊図書を一
緒に扱う古書店」というのを中期的な目標とし
ていました。勤め帰りの夜間と土日の昼間にイ
ンターネット技術の専門学校に通い始めて、学
校修了後は新刊書店に転職して月曜から金曜ま
でフルタイムで働かせてもらい、土日は古書店
さんや古本催事のお帳場で使っていただまし
た。そうするとだんだんと現実が見えてきて

実店舗主体で稼ぐにはよほどよい場所に店を構
えないと厳しそうだな、とか。私には潤沢な資
金はないから実店舗を開くならインターネット
販売を稼ぎの軸にせざるを得なさ、とか。それ
ならいつそ実店舗の開設は郷里の町にしよう、
その時点で移転して、町に根付いた古本屋をめ
ざそう、……という具合でおそろしくラフな青写
真を描いていました。なにしろきつかけのモチ
ベーションが「正月元旦にも開いている店」「棚
にぎつしり本の背が並ぶ店」そんなイメージで
したから。

だけど結局ご覧のとおり古本屋になってお
ります。早々に横道にそれました。なんとかな
ると思つて見切り発車で開業したもの、古本
をとりまく環境の変化は激しくて青写真はある
という間に絵にかいた餅、このままだとすごく
まずいなあと考え始めた時期と、さきほどお話
した皐月まつりの時期がちやうど重なってい
ます。あの時の日記、このままでは食い詰める
こと必定で失う物が何もない暢気でアホな古本
屋を拾つてくれようとしたのかもしれない。
「働け！」つてね。あれはいつたいうという史
料だったんだか……いまさらわかりませんが、で
もあの時を境に市場の見え方が徐々に変わって
いきました。あの品物に古物商の目を開いても
らつた、今はそう思っています。

市沢 そういう衝撃を受けたところから、実際にそれをお仕事にされるところまでは距離が随分とありますよね。

原 すごくありました。

市沢 どんなふうに今のお仕事に近づいていくことになったのですか。

原 開業前、最初の二年間は会社勤めの合同にインターネット技術の専門学校に通い、修了後の三年間は転職して月曜から金曜まではフルタイムで新刊書店さん、土日は古書店さんや古本催事のお帳場アルバイトとして働かせてもらって、見様見真似で仕事を覚えようとしていました。古本催事のお帳場アルバイトというのは、お客様が会場を回遊して参加古書店さんたちの棚からお帳場にお持ちになった品物の会計係なのですが、お客様と古書店さんの会話に耳を傾けながら一冊一冊の値札を確認してレジを打つわけですから、本の値ごろ感が自然と身に着くありがたいアルバイトでした。ある日、そんな古本催事で度々お世話になっていた赤塚の司書房さんから呼び止められ、「聞いたよ、原さん古本屋になりたんだって？ だったらなんでバイトなんてしてるんだ？ 始めればいいでしょう、グズグズしてないで自分で始めればいいんだよ。（もういい歳なのに）今さら修行つたって一体いつになるんだ。いいから自分で始

めてしまいなさい。自分でやるのが一番の修行だよ。覚悟があるならうちの組ではじめてみるか？」と言われました。二〇〇七年八月お盆、西武百貨店古本祭りのお帳場でした。司書房さんは一九七〇年代に、二〇歳代で初代開業した方で、川越街道沿いのお店をご家族で経営される傍ら、関東圏の商業施設あちこちで開催される古本催事のまとめ役、つまり施設側と直に商談して、一〇店前後の参加店を統率して会場内とお帳場を管理する役を務めておられました。数々いらつしやるまとめ役の中でも司書房さんは服装規律と勤怠にとりわけ厳しくて、ルーズにふるまえば誰であろうがこっぴどく叱り飛ばされ、やる気があれば働きやすい現場のムードが出来上がっていました。「来月だよ、九月二五日から川口で一週間、棚を組み上げる五尺台を三台受け持つこと。開店まもない商業施設だからお客の入り具合はわからないけど、一階催事場つてことで場所はいいんだから補充分もぬかりなく、やれる？」とその場で尋ねられました。さすがに急すぎて即答はできませんでしたが心は決まり、すぐに古物商許可申請の準備をしました。それから時間は時間との闘いで、ようやく会期一週間前に赤塚の司書房に駆け込んで「準備出来ました！ 入れてください、まだ間に合いますか？」と言ったら、「え、本当に来た

の」って。冷静に考えたら、あのタイミングに飛び入りがいいると会場図面を引き直さないとイケなかったはずなんですけど、そういうことはまったくおとしやらず、快く入れてくださいました。帰りがけに奥さまが「よく食べてよく働いて！」と言って食品をいろいろ持たせてくださいました。二〇〇七年九月のことです。川口のアとも、その年は司書房さんの組に入れていただいて何ヶ所かの古本催事に参加しました。そうなるとにかく一氣に仕入れが手詰まりになってしまつて……。そういうわけで、年が明けて二〇〇八年一月に古書組合（東京都古書籍商業協同組合）に加入しました。組合員になると業者の古書市場で売り買いができますから。

古市 組合に入るっていうのは、何か特別な資格とかそういうのはないのですか。

原 資格としては、まず古物営業法の規定により東京都公安委員会から古物商の許可を受け、古書籍類を扱う小規模事業者であること。そして東京都の地区内に事業所を有すること。以上を満たした有資格者が、主として古書籍販売業に従事し、併せてそのための店舗もしくは事務所を設置していなければなりません。また名義人もしくは主として営業に従事しようとする者が、引き続き他業からの給与所得によつて生計を維持する場合は承認されません。加入申込に

あたつては保証人一名と連名の誓約書を提出する必要があります。加入時の組合理事面接では、組合加入後は組合の運営に参画する意思があることなども求められます。

今は要件に「店舗もしくは事務所の設置」とあつて、うちのような事務所営業も認めてもらえますが、私が加入する少し前まで無店舗事業者は加入不可でした。インターネット販売専門の事業者が急速に増えたこともあつて、とうとう無店舗事業者を受け入れた経緯があつたように聞いています。

加入時の面接では事業者の営業実態について確認されます。私にはその時点で店舗やインターネット販売サイトがなく、古書店に常勤した修行経験もなかったため、面接官の理事さんはおそらくたいそうご不安だったことと想像しますが、営業実態について司書房さんが保証してくださったおかげでなんとか加入させていただけました。

市沢 最初、近世文書に出会われた後も、しばらくは催事をやっておられたのですか。

原 そうです。えつと（手元のノートを見る）皐月まつりが二〇〇八年五月でしたから、二〇〇八年は：池袋西口公園、千葉パルコ、川越パルコ、東松山、渋谷パルコ、西武百貨店：たつぷり年末まであちこち回っていたようです

ね。

一同（笑）

古市 催事をずっと回っておられたのですね。

原 はい、開業して二年間ほどは毎月どこかしらに新店を出していました。池袋西口公園でしたか、露天でしたから雨が降ってえらいめにあいまして。大慌てでブルーシートをかけて雨が止むまでじっと待たりました。大変なこともありましたが楽しかったです。二〇〇八年は、今月を切り抜けたんだから来月もなんとかなるサ、と根柢なく楽天的でいられた最後の年でした。

一同（笑）

原 さきほどお話した皐月まつりの一件も二〇〇八年の五月でした。あの日は、じつはもう一つよく覚えていた出来事がありました。開業前のお帳場アルバイト時代には東京古書会館の地下で毎週開催されている古書展のひとつ、和洋会古書展でも時々使っていたたておりまして、その参加古書店さんのうち最長老で、神田神保町のお店で古典籍をお扱いの金文堂書店ご主人が、皐月まつりの会場で思いがけず声をかけて下さいました。開業前後の経緯をご報告すると「そうかい、そうかい」と深く頷かれて、ふと「この市場に来ているということとは、あなた古典籍に興味があるのかな？」とお聞きになりました。「いえいえとんでもありません、今日はじめて来たばかりで、私なんかとてもとても」と答えるのをピシヤリと遮るように、「あなたね、この市場には続けて来ないといけませんよ。廻しの席に着席してしつかり本を見て勉強なさい。怠けて休んではいけません、古典会には来週も再来週も続けていらつしやい」と厳格な調子でおっしゃいました。後に私は和洋会古書展に参加させていただくようになるのですが、この方はいつも本当に怖かったです。叱られるとか指導されるとかではないのですが、やさしい顔だちなのに一瞬のひと睨みが静かに怖かった。でも金文堂さんにお会いしていなければ、私はたぶん今のようない分野に進んでいなかったと思います。

ともあれ、ひっきりなしに古本催事を巡回していたあの二〇〇八年、六月からは毎週火曜日の東京古典会に通うようになりました。何週か顔を出しては届かない札を入れ続けているところある時、会場内で経営主任の近藤書店さんが「毎週この市場に来てるようだけど、だったらこの市場で働く経営員をやってみませんか？」と声をかけて下さいました。

東京組合には現在、一般書中心の中央市会、古典籍の東京古典会、洋書の東京洋書会、学術雑誌・年報・報告書・官庁刊行物など資料物中心の東京資料会、近代文学・美術・近代文献等

の明治古典会という五つの市会いちかいが存在し、神田小川町の東京古書会館で木曜を除く毎日各市会の交換会が開催されています。どの市会もそれぞれ七〜八名の経営員を擁しております、会場の設営、出品者からの荷受け開梱、出品物の陳列、会場の環境管理、開札、荷寄せ、会場の原状復帰から清掃まで携わり、会員幹事を補佐して市場の運営補助にあたります。経営員は古本屋の子弟や店員、開業したての新人業者などから採用され、日給で働きます。毎週多くの出品物を扱いますから本の勉強になりますし、古書流通についても学べる絶好の機会です。東京古典会の経営員は開業したばかりの新人業者が多くて、経営員時代を共に過ごした彼等には、経営員を卒業したあともずっと仲間意識が残るといいますか、なにかあった時には頼りますし、頑張っておられると誇らしくて自分自身の励みにもなります。五年余りのあいだ東京古典会の経営員として学ばせていただけたことは、私にとって本当に得難い経験になりました。

市沢 そんな世界があるんですね。

原 こうして市場で働かせてもらうようになりましたが、だからといって近世史料は、どうか古典籍全般ですが、まだまだ自分は扱えそうにありませんでした。崩し字という大きな壁がありましたから。なにより最初に必要なのは崩

し字を読む訓練でした。幸い、古典会の会員さんたちが代々継続しておられる(崩し字を)「読む会」という勉強会がありまして、経営員の試行期間に声をかけていただいて参加させていただけのことになりました。古典会の会員さんたちについてのは何代も続いている古書店さんたちが多くて、中には江戸時代から続いている本屋さんもいらつしやいます。そういう店のご子弟はこの「読む会」以外にも適宜集合しているいろんな勉強会を開いてらつしやるとも聞きます。「読む会」に誘っていただけたのはとても幸運でした。

松本 そんな勉強会があるんですね。コピーが配られてそれを読んだりするのですか。

原 そうです。会員さんたちが近隣にある大学の国文学の先生を毎週お招きしていて、その先生が持つて来て下さるいろいろなコピーを車座になつて順番に読み進めました。古筆切、俳書、草双紙など国文学系の仮名を読むことが多かったのですが、文人の尺牘や松雲公の日記などもありました。初心者の私は常にストッパーでしたからずっとヒヤヒヤしどおしでしたが、持ち帰ったプリントを読み返す夜中のひとときは大切な時間になりました。

古市 古書組合といえ、我々が神保町つてイメージすると八木書店とか、一誠堂とか、昔

の反町さんの『一古書肆の思い出』に出てくるような超老舗の本屋さんがあるじゃないですか。そういう顔ぶれというのは余り変わってないですか。そういう人たちがやっているのだけど、でも新しくやりたいという人に、それはいいよつて受け入れてくれる素地もあるということですか。

原 当時、そもそもうちのような店がそういう一流書店のご当主たちの意識の端にのぼることはなかったと思いますが、でも少なくとも東京古典会会員の書店さんたちは、一線を引きながらも存在することは許容してくださっていたのではないかと思います。「読む会」に入れて下さつたし。

古市 これからの古書界の変動に対応するためということでしょうか。

原 そういうこともあるかもしれませんが。そういうえば、彼等はよく集まって博物館などの見学に出かけるのですが、私たち経営員も時々はそのような機会に参加させていただきました。老舗の息子さんたちが展示物についてあれこれ話しておられた内容を耳にして、たいへん刺激になりました。なにはともあれ、古本催事に参加する日々の中で毎日少しずつ崩し字を読む習慣が出来始めたことは、結果的に私にとつていい変化だったと思います。

そんな中、二〇〇九年の一月から先ほど少しお話しした和洋会古書展に出展参加させていただけになりました。これは本当にうれしかったです。神田小川町の東京古書会館の地下ホールではほぼ毎週金曜土曜の二日間ずつ、いろいろな同人会主催の古書即売展が開催されています。各同人会は十数店の古書店から成り、概ね隔月で年六回、組合に賃料を払い地下ホールを貸し切ってお客様を招きます。会期前には各店の出品特選目録を集めて発行した合同目録を出展古書店のお客様たちに全国発送しますから、自店では普段わない分野の目録販売に挑戦する機会に恵まれるわけです。しかも古書会館は台車を動かしやすい導線や頑丈なエレベーターがあるので、各地のスーパーやデパートに比べて大量の本を移動させるのも格段に楽になります。そういう恵まれた環境で年六回の安定した売り場が約束されるのは、心底ありがたかったです。和洋会は開業前に何度かお帳場のアルバイトをさせていただいた同人会で、長老はさきほどお話しした金文堂書店さん、司書房さんもうらっしゃいました。

古市 その時はまだ古文書とか古典籍ではなくて、一般の洋装本の目録をつくるという、そういうお話ですよ、今の。

原 そうです、洋装本の目録から始めました。

ここに最初の目録を持ってきたんですけど。こんな感じの…（と目録を示す）。

市沢 よくある目録ですね。

原 そうなんです。

松本 この洋装本にしても、売り方から何からそれこそ目録の作り方から実際にはお一人でなさったのですか。

原 開業前から古書展に通って合同目録をたくさん集めておりまして、よそ様の目録から古書目録特有の様式とか、本と値段とか、この時に備えてとにかくひたすら頭に入れていたんです。ですから目録は先輩方の真似、完全コピーからはじめました。洋装本の取扱い方や売り方の基本は司書房さんや、あちこちの古本催事で店番の当番でいつしよになった古書店さんたちから教わりました。催事で知り合った本屋さんたちには本当によくしていただきました。みなさん地元ではしつかりしたお店のご当主なのに、私みたいな「どこの馬の骨？」っていう新人でも、必死で尋ねれば熱心に教えて下さいました。自分たちも新人時代はそうやって苦労してやってきたんだよって。

松本 それは、大学を卒業して就職を、という感じで入ってくる人とか、自分で古書店を開きたいという人とか、新しく皆さん入ってこられるわけですか。

原 どうでしょう、新卒で古書業界に「就職」として入ってくる人っていうのは、全国に点在する老舗古書店さんとか店売りが繁盛しているところから人気店への就職でしょうか。しつかりしたお店で一〇年前後修行して独立開業される新規参入店は正統派のエリートです。古本屋ってどんな一流店さんでも基本的に家族経営のところが大半だと思うのですが、古典籍を扱う店だと若い古本屋の過半は既存店の息子さんとかお嬢さんなのかなと感じます、東京では。あ、でも最近一般書中心の市会に行ったら入札しているのが若者だけでしたっけ。とにかくすご



司会 松本充弘

い熱気で、とっても活気がありました。あそこには新規参入の初代さんたちがたくさんいたのかもしれない。あれほどではないにせよ、東京の古典籍専門店にも新規参入の初代はたくさんいますが、やはり何代目かの息子さんたちやお嬢さんたちのご活躍が目立ちますね。

市沢 ちゃんと継ぐ人がいるっていうことですね。

原 そうです。みなさん、一旦どこかに就職しても、戻ってきて自分のおうちを継いでおられます。もしかしたら戻って継ぐために一旦どこかに就職している人もいるのかなあ。

松本 そういう人たちは、帰ってきたらそれこそ一から勉強ということですか。

原 一緒に「読む会」です。ですがご家業ですから、やはり子供の頃から生活の中で古典籍とその商いに触れて育ってこられたというのは、私などとは随分違います。

市沢 それで、古文書を扱うようになられたのですね、同じ場所です。

原 同じ場所です。

そうだ、最初の和洋会ではさきほどお見せしたような目録を書いて出品してみたんですけど、これがまたちっとも売れなかったんですよ。

一同 えー。

原 本当にもうサッパリ売れなくて。値段もき

ちんと做ったし、なんならちよつとずつ安目につけたし、目録の書き方も先輩方にはこれで問題ないんじゃないかと言ってもらったのに、それはもう見事に売れなかったんです。会場で私が担当した四台の陳列棚にはその何十倍もの本を持ち込んでギッシリ詰めて並べたんですけど、「うちの棚は壁ですか？」というぐらいお客さんがみんな素通りするんです。素通りしてくればまだいいけど、中には金文堂さんの棚から均一価格の和本を山ほど持ってきてウチの平積みの上にバーツと広げて品定めをはじめちゃうお客さんもいて…。

一同（笑）

原 お帳場脇からその光景を目撃して「うわー 厳しい…」と茫然自失していたら、市場でいつもお目にかかっている文学堂書店さんがいつのまにか傍らに立つてらして、ニコニコ笑いながら「どうです、なかなかむずかしいもんでしょう？」とおっしゃる。文学堂書店の内藤さんは新宿落合にある人気店のご主人で、和洋会とは別の同人主催の趣味の古書展では売り頭の長老書店さんでした。古典籍、古地図、錦絵、古文書、近代文学書、近代資料、学術書、雑誌、絵本…といろいろな分野に精通し、店売りで自家目録で全国に多くのお客様がいらっしゃる大先輩でしたが、市場では誰に対しても分け隔てな

く気さくに話しかけてくださる方でした。当時すでに御年八十代でしたが市場で旺盛にお商売なさっていて、それでも古本屋の仕事が心底好きで本と本屋（とりわけ初代の新人）に興味津々でいらして、いつも市場が楽しくて仕方ない様子でした。

「どれ、じゃあちよつとあなたの棚を見てみようか」と棚に向かわれたのでついて行くと、うちの四台の棚を隅々までじっくりご覧になり「これは売れないねえ」とおっしゃって、「目録も見たよ。注文がなかっただろう？ だってあれは、あるような本をあるように書いて並べただけだからね。それらしく体裁を整えたって展覧会の目の肥えたお客さんはお見通しだよ。あなた本当に自分であの目録をおもしろいと思ったかい？」と。絶句する私に、「本屋はね、買いすぎて潰れた店はないけど、買わずに潰れた店はごまんとあるんだ。あなた市場ではいつもすぐく楽しそうに見てるじゃないか。どうしてそちのおもしろいもののほうを買わないの？」それだけおっしゃると会場をあとにされました。おもしろいもの？ まるで謎かけのようでした。

そのころ、東京古典会の新米経営員だった私は市場終了後に会員の文学堂書店内藤さんを通りまでお送りする役目を仰せつかっていまし

た。内藤さんのたくさんの落札品を両手に抱えてお供し、大通りでタクシーを拾ってお見送りするんです。会場を出てから大通りでタクシーのドアが閉まるまでの五分間ほどだったでしょうが、最初の和洋会でお会いして以来、毎週この五分間が授業時間になりました。「今日は〇〇を見ていたね、随分楽しそうに見ていたじゃないか、ああいうのに入札しなきゃあ。なのに△△に入札していたね。落札できた△△は本当におもしろかったかい？知っている本だから入札しよう？あなたが知ってる本なんて、目の肥えたお客はもう見飽きて誰も買わないよ」という具合に毎週その日の反省会から始まり、大通りに出たらタクシーが停車するまでのほんの数秒の間にきまって「苦しいだろう？いいかい今が正念場だ、お金を使えんじやないよ、お金は全部あなたが市場で心の底から楽しいと感じた品物と、頭に入れるもの（参考書）のためだけに使えんだ。それ以外余計なお金はぜったいに使っちゃだめだよ」とおっしゃったものでした。毎週まるで呪文のようにおっしゃったその声は、今も時々頭の中に降ってきます。

ですが当時は内藤さんがおっしゃる「楽しそう」という感覚に自分自身で自覚がなくて、ある日市場を出て階下に向かうエレベーターの中

で「内藤さんは私を見ていつも楽しそうだとおっしゃいますけど、正直私は市場で入札するときに楽しいと感じたことはこれまで一度もありません。その『楽しい』っていうのはどういう感覚のことなんですか？」と尋ねると「芯からわからなくて目が離せなくなる心持ちだろうねえ」とおっしゃって、やつと合点がきました。すると「次の古典会から、これはと思うものを見つけたら私に声をかけなさい。幾らぐらいで落札できるかこっそり教えてあげるから」って。二〇〇九年の春のことでした。

一同（感嘆）

はじめて古文書を取り扱う

原 この年（二〇〇九年）六月のある日、古典会の市場開場前に床一面に散らばった紐や段ボールをかき集めて掃き清めていた私の目の端にひんやりした匂いを放つものがひつかかってきて、振り返って目を合わすと首根っこをガツチリ掴まれたような感覚に襲われました。そこには開梱された大きな段ボール三箱から剥き出しになった文書の山がどかんと置かれていて、入札封筒には「会津の古文書 三箱一括」と書かれていました。「来た！」と観念して、お昼すぎに会場にいらした内藤さんに「居ました、

目が合いました、あれです」と報告したら、「おおこれかい。いいものだけど、あなたに売りこなせるかな？」とおっしゃって。「買って潰れた店はないとおっしゃいましたよね、それなら今日私が彼等（文書）を連れて帰る（落札する）には幾らの札を書けばいいのか教えてください」とお願いすると、領いて無言のまま手元の入札用紙に書いて「こういうふうに入れると多分この辺で落札できる」と教えてくださいました。そのとおりに書いて入れると、本当に上のほうの札でぎりぎり落札できたんです。でもそれって当時の小店にとってはもう何ヶ月分かの仕入れ資金なんです。落札した瞬間、これはやばいって思いました。

一同（笑）

原 支払い後の通帳残金を考えてドキドキしていたら、ニッコニコの内藤さんが「落札できたねえ」って。

一同（笑）

原 「取りあえず、怠けないで全部見なさい。一点、一点、一枚、一枚全部見て、見終わったら端から全部そのままのとりの姿に戻すんだよ。冊子状のものの中でなにかよさそうなものがあつたら、それを別建てにできちんと売rinaさい。そういう一冊を見極めて生かすのが本屋の腕だからね。それで何とかなるから」と言

われまして、後日会津藩名士録といった内容のガリ版刷の小冊子をいただきました。

でも、その時の私はまだ崩し字の平仮名すら十分満足には読めませんでした。全部見終わるまでにいつたいどれだけ時間がかかるんだろうと考えておろおろしていると、市場に来ていた司書房さんに「なにを今さら青い顔をしてるんだ、和洋会九月の目録締切までに目録に採ればいいでしょう、考えている暇に一文字でも読むんだよ」と叱り飛ばされました、数日後「うちに何冊かある本だから、これでなんとかしなさい」と言って荒居英次さんが編集した小宮山出版の『近世の古文書』という本を下さいました。なので、まず最初に大急ぎでそれを丸覚えしたんです。

古市 丸覚えってすごいじゃないですか。

原 文書現品の何点かをザッと眺めた印象から農村文書の章に当りをつけまして、そこに掲載されている文書写真それぞれの標題をまず一行まるごと形として丸覚えしていきしました。冊子も文書も標題だけは絶対読もうと思ったので。「読む会」で地方文書が取り上げられることはありませんでしたし、「乍恐…」などの定型さえこの作業をするまでほとんど縁がありませんでした。とにかく標題と年記と誰が誰に発給したかだけ、寝ても覚めても、というか、古



本催事のお帳場でも暇な時間帯にはこっそり携帯したものを手元で広げて一枚一枚、一冊一冊、どうしても読めない字はどんどんとぼして約六九〇点どうにか通覧しました。六九〇点のうち五五点は冊子でした。とにかくそれを夜な夜なExcelに採録して標題別で年代順に並べて眺めて、合同目録の限られたスペースに収まるようにどうにか目録を書き上げました。『近世の古文書』は解題もありがたかったです。今も事務所の本棚に置いて時々参照しています。

一同（感嘆）

原 標題などおおかたExcelに採り終えた頃になると、全点一括で売ること以外は考えられなくなっていました。「貴重な一冊を埋もれさせることなく選び出して目録に採る」のが本屋の仕事、商いのコツだという道理は理解したので

すが、そもそも私にはどれが本当に貴重な一冊かを正確に判断する力量がなく、力量もないくせにスクラムを組んだ彼等（その文書群）に抵抗する勇氣など湧いてきませんでした。入稿の日、司書房さんに恐る恐るそのことを報告したところ、一括で納得して受け入れてくれるお客様としては、たとえば地元の図書館などの公共機関が考えられるから思いつく所にはすべて目録を送ってみなさいとアドバイスを受け、すぐその準備にとりかかりました。司書房さんも拡大コピーしたその目録ページを地元新聞社芸芸部にFAXしてくださったそうで、新聞記者さんのご紹介で地元の歴史博物館さんがすぐ小店にお問い合わせのお電話を下さったんです。「これはうちの町にとって大事なものだから、まずは現物を確認したい、どこに行けば見られるのですか？」とお尋ねで、和洋会会期中の古書会館にお迎えすることになりました。その博物館から学芸員さんらしき人たちが三人いらして文書を手に取って御覧になって、それで「ああこれだ、間違いない」って。地元の蔵から出て寄贈された文書があったそうですが、含まれているはずの一揆に関する資料が見当たらず、「泣き別れたものがこちらにあったんですね、みつかってよかった」とおっしゃって。

私としては予想だにしなかった早い展開に

「えつ、一括でお買い求めいただけるんだ…」と却ってびっくりしました。茫然としている私に対し、最初にお電話をくださった学芸員さんが「この文書は町の文化財ですから」とおっしゃいました。そして博物館のみなさんと地元の郷土史家の方たちのお仕事についてわかりやすくご説明くださり、そういうお取組みに無頓着なままその文書を仕入れて、大慌てで目録に採った私としては申し訳ないような恥ずかしいような、なんとも背筋の伸びる思いでした。ご教示ただけて本当にありがたかったです。

ただ…(間) 半年後、だったんですね、いろいろな会議や事務手続の数々を経た後のご入金。そういうことに頓着しないまま勢いに任せて扱ってしまつて。

一同 (感嘆、笑)

原 それもこれもすべてが学びでした。「地方文書」を仕入れてしかるべき公共機関に販売するということは、駆け出しの本屋にとつて相当覚悟が必要な商いだと痛感しました。

古市 値切られはしなかったのですか。

原 そういうことは求められませんでした。

古市 それはすばらしい。

市沢 その時つくられた目録っていうのは、六九〇通全部を書き上げられたのですか。どういう目録だったのでしょうか。

原 標題として国郡村名と旧蔵家名を採録して全点が成立した期間を述べ、本文は全体を江戸時代と明治元年以後に分けて、それぞれまず冊子の標題ごとに冊数等を書き上げました。たとえば江戸時代の冊子なら二六種類の標題があったので、「御取箇御勘定目録」は何年から何年まで何冊といった具合に一種類ずつ掲出ししました。次に絵図は四枚しかなかったので全点の標題・寸法・状態を採録し、一紙文書は何らかの事件や特徴的な環境に関わる内容のものをだけを選び出して標題・年記・枚数だけ採録、あとは全点数のみの表記に留めました。展覧会合同目録は様式に制限がありスペースにも限りがあったので、Excelに採録した要素をどうにかして簡略化する必要がありました。とはいえ私には全体を把握し、ポイントを絞って要領よく伝える技量など到底ありませんでしたから、迷った末にああした方法でまとめました。とても拙い目録でしたが、あれがその時点で私にできる精一杯のことでした。

松本 その文書群は、市場に出る段階でこれは重要なもの、だということ選別を受けていたわけでしょうか。

原 通常の市場に出品される品物は基本的に全点を当日の午前中に開梱し、市場開場までの三時間足らずの間に全点を並べ切らなければなり

ませんので厳密な選別はしませんが、一見して「よいもの」や「珍しいもの」は緋毛氈を敷いた中台に並べます。場所を選ぶのは古典会の幹事会員とベテラン経営員です。あの文書は結局中台に置かれたように記憶しています。

迷いの時期

市沢 ちよつと話さかのぼりますけど。例えば勉強会とかにこられる若い方々は、別に歴史を勉強されたり、国文学を勉強されたりしているわけではないわけですか。

原 本屋の勉強会というのは職務上必要な技能と教養を習得するためのものです。私が参加させていただいたことのある勉強会は、崩し字を読む訓練と、書誌学を学ぶためのものでした。ひよつとすると個々人で国文学や歴史に関する勉強会を開催・参加しているかもしれないんですが、私にはわかりません。また、先に申しましたとおり古本屋の中には大学院生から転身された方や、あるいはご退職後にご研究と商いを両立させておられる先生などいて、長年の専門分野と本屋としての扱い分野が直結しているケースも存在します。ですが、周囲を眺めた限りではそれほど多くないような気がします。

市沢 じゃあ、今言われたようにお仕事の中で

そういう物を扱う人と出会って、またいろいろ勉強することでしょうか。

原 そうです。ことに私のような初代開業者にとつては、市場でどういう品物と目が合うか、商いを通してどういうお客さまと出会うか、どういう先輩同業者の影響を受けるか、どういう同業者と競い合い、どういう人たちと語り合うか、そういう中で採まれながらだんだんと自分の進むべき方向（扱い分野と扱い方）が定まり、それに相応しい勉強方法を各々自分で見つけていく、という具合です。

市沢 今お話を聞いてみると、一回目にとってもいい出会いをされて、博物館の方の熱意も受け止められたのだなと思いました。

原 本当にそうです。地方文書は地域にとつてかけがえのない文化財である、あの段階でその地域の学芸員さんから直に薫陶を受けることが出来たのは、私にとつて今の扱い分野につながるひとつの大きな分岐点だったと思います。

ですが、あの時点で即座に「それでは地方文書をどんどん扱っていいこう」とは到底思えませんでした。そもそも私があの文書を無事ご当地に納品出来たのは偶然の賜物、完全なるまぐれでした。一点ずつ開いて調べ続けたひと夏、あの『近世の古文書』の解題から地方文書というものの性格を徐々に察知しはじめ、翻って目の

前の文書群の背景に広がる世界に対してあまりにも無知な自分を強烈に自覚するにつれて、長い年月誰かが開いた気配のないその一冊、その一葉をこんなにも無知な自分がどんどん開いていくことは冒険に値する行為なのでは？と思えてジワジワと怖気づいていきました。けれどもほかでもない彼等（その文書群）がモノとして放つ圧が、手を止めることを許してくれませんでした。標題を採録する作業自体にだんだん慣れてくると「内側を覗きたい」「この文書固有の事情を理解したい」という衝動に駆られました。ですが、だからといって不用意に踏み込むと真つ暗闇に足をとられて全部を投げ出してしまいそうな気がして、敢えて余計なことを考えないよう脇見せず集中して最後まで採録し続けました。それはなかなか不健康な作業でした。あの時は司書房さんの機転とあの文書自身が持つていた幸運のおかげでどうにか然るべき機関様に送り届けることが出来たけれど、時間が経つにしたがつて怖さだけが増幅して「二度目の幸運はあり得ない、今の自分じゃ絶対無理、当分彼等と目を合わせちゃダメだ」というように、地方文書のようなひとまとまりの貴重な史料からは逃げたい気持ちがあふれだしていききました。知識も資金もなにもかも足りていませんでしたから。ことに圧倒的な知識不足は、いった

いどこから手をつければいいのかわかりませんでした。それに、あのときの経験で最も強く感じたのは「書物の販売手法と地方文書の販売手法は本来別物ではないのか？」という初步的な疑問でした。

原体験としての書道

古市 そういうモノとしての古文書の迫力みたいなことに圧倒された、ずつとおつしやっているとと思うのですけれど、その感性、その感じ方っていうのはどこから来ているのか、御自身の分析がありますか。

原 そこはまったくわかりません。本屋になるまでは特に歴史が好きというわけでもありませんでした。高校の日本史の先生は古代史を専攻してらした方で、授業は一年かけてやつと平安時代にやつとたどり着いた。翌年の先生は鎌倉時代から天保の改革あたりまでは超特急で、幕末明治維新から戦中までのお話はたつぷりと。

古市 昔の進学校の先生ってそうですよね（笑）。**原** たしか授業かなにかで発掘している現場を遠巻きに見ました。歴史学っていうのはそういうものかと。子供の頃、歴史学者というのは土を少しずつ掃き続けてなにかを掘り出す人のことだつてイメージしていました。

古市 だから、そこで古文書がくつついたわけでもないですね。

原 ないですね。日本史へのなんらかの興味から古文書に対する感性が生じたわけではないようです…。

ですが、そういえば、早く亡くなった私の母は長い間書道を愛好し続けた人で、幼い頃は墨をする音や匂いがいつも身近にありました。たぶんその影響でしょうか、私自身も書を眺めるのは好きで、子供の頃は毎年正倉院展に連れて行ってもらうのが楽しみでした。

古市 正倉院文書ですね。

原 はい。高校の書道室では級友と王羲之や欧阳詢の法帖の図版を収めた手本を眺めて模写の真似事、いい時間でした。「読む会」で王羲之と孫過庭の尺牘を読む日があって、ああやっぱいいなあとあらためて思い、すぐに二玄社の中国法書選を何冊か買い求めました。それを机脇の参考書棚に常備しています。ひとつの史料を調べ終わって目録採録まで完了した時に王羲之の尺牘をゆっくり眺めると、目が真ん中に戻るんです。それが次の史料に移る前の私の儀式になっています。いま思いついた回答で申し訳ないのですが、私の場合古文書に対する感覚の一端は「墨と筆の跡」つてところが呼び水になっているような気がします。

「感覚」ということについて、少し現在の話を見せてください。

うちが扱うのは江戸時代前後の人が墨と筆を使ってその手で書き記した品物がほとんどです。個々の品物と最初に対峙するときは、その品物が「モノ」としてまとう迫力に対して多かれ少なかれ畏れに近いものを感じます。その「迫力」というのは、品物とか商品としてではなく、史料でもなく、彼等（史料）が本来在籍した時空の文脈から完全に切り離され、なお厳然と今ここにある「モノ」として放つ固有の凄みです。私はそういつた「モノ」たちと、業者が集う競り市の会場で目が合い、縁あって競り勝つことがかなえば、店に連れ帰った彼等がいったい何者なのか、なにはともあれまずは調べてみなければなりません。彼等の背景に関して圧倒的に無知な私はいつも「それでは邪魔します…」という頼りない心持ちで読み始めるわけですが、なにしろ筆と墨で書かれた文字というのは記された意味より早く直に訴えかけて来るところが強くて（筆跡の類型は時に書き手の属性をにおわせ、筆勢のゆらぎは書き手の思いがけない情動を露呈し…といった具合に）、書き手ごとに癖のある筆跡筆勢に導かれて（振り回されて）背景に広がる混沌とした世界に分け入るうち、だんだんと彼等に対してのつびきならぬ

心持ちになります。品物によって程度の差こそありますが、私にとつてそれは今もいつも怖いことです。読み進むほどに連鎖増殖していく「わからなさ」に足下を掬めとられて身動きが取れなくなる怖さ、読み進めることも見捨てて戻ってくることもできなくなる怖さ、そして、いつまでたつても目録が出来あがらないコワさといえますか…。ですが、こういうとき本場に頼りになる学術書がいくつか手元にあつて、序章から本文、注、文献一覧まで隅々注意深く読み尽くすことができれば、その本がその本なりの地図を私に示してくれます。しっかりと地図をいくつか得ることができたら、その史料を読み進む足下がようやくほんの僅か自由になる。こういう進み方もあるでしょうと折に触れ具体的な書名をあげつつご教示下さったのはお客様、というか研究者の方々でした。ともあれ、商いの前段階として品物を調べる際には常にいくつもそうした「地図」が必要になるもので、日頃から気になる新刊旧刊は出来る限り入手して備えて置こうと、だんだんとそういうふうになってきました。

同じ頃に開業した同業者たちを見わたすと、どんな分野を扱う古本屋も大なり小なりそういうところがあるように感じます。つまり、出くわした品物にときとして畏れを覚えることと

か、未知の品物との遭遇が怖くて夜中にひとり人知れず備えているであろうこととか。もちろん、多くの方々はしつかりしたお店で店員として何年も修業を積まれているので、私などより何十倍も物事をよくご存じですけどね。

「史料」を身近なものとして意識したとき

原 話を二〇〇九年九月に戻します。

「最初の文書が売れました」と文学堂書店の内藤さんに報告すると「え、もうはや注文があったのかい？」ととても驚き、喜んでくださいました。「あなたはああいいう品物に対して勘が働くようだから、これからもどんどんおやんなさい」とおっしゃって、市場では引き続き要所要所で親身にご指導くださいました。ですが私のほうでは「ああいいう品物」とはしばらく距離を置きたい、当面はできるだけ「本」に近い薄めの一冊物を選んで一点ずつ丁寧に扱っていかうと決めていました。具体的には実録読物や一件記録などの近世写本です。なので、二〇〇九年一二月の和洋会古書展に向けて早速そういうものばかりこまごまと仕入れ始めまして、実録ならまずそれぞれの本文を通覧して内容の概略を把握したうえで国書総目録を引き、一件記録の写本なら国史大辞典と首っ引きで用語の意味を

確認しながらゆつくりと読み進みました。目録の採り方も身の丈にあつた形を模索して、一行で完結させるべきところを二行、三行と説明を加えるようになりました。その説明つづりがあまりにも素人丸出しの垢抜けないものだったので諸先輩がたから「出鱈目だ」と苦言を頂戴することもありましたが、一流店の皆様の真似をしたつて和洋会古書展（古書会館での目録付古書即売会）のお客様にはお見通しだと、もう既にそういう洗礼はしつかり受けていましたので、むしろ「こう見ました」というのを白日の下にさらした上で値段をつけ、あわよくばお問い合わせのお客様から誤りのご指摘やお叱り、ご指導を仰ごうと開き直ったんです。

そういう仕入れ品の中に、もともと和装だった写本を明治期に洋装に改装した写本一冊がありまして、打付書などの原題が残されていなかったのですが本文を読むとどうやら法令文らしい、と。明治期以前の法令としてかろうじて記憶に残っていた数少ない書名のうち、とりあえず江戸時代の公事方御定書の本文と本書を比べてみようと思ひ立つて図書館に向かい、館の司書さんが教えて下さった『徳川禁令考』を参照すると果たしてほぼ一致、これで書名が採れると小躍りしたのですが、条数が若干異なることが気になり、念のため目録には条数の詳細も

記入しました。一二月の和洋会古書展当日、日本法制史が専門の先生が古書会館の売場におみえになつて、売場に陳列していたその法令書と目録を手には「目録を見ると標題に『公事方御定書』とありますがこの本にはそのような標題が見当たりません、どなたがこの本の標題を『公事方御定書』としたのですか？」とお尋ねになりました。あなにか間違えてしまったんだなあ：と思いながら図書館での経緯をお話したところ、公事方御定書と通称される幕府の秘密法の写本は数多く伝存するけれど、筆写時期や写筆者の立場によつて様々な書名が付与されて伝播し、実際に「公事方御定書」と標記された写本は稀なのですとご教示のうえ、「それではこの本は私がいただきます」とお買い上げ下さいました。年が明けて二〇一〇年正月早々、思いがけず先生からの一通の封書が店に届きました。ご親切にも「充分な検討はこれからですが、この写本は上質な法文を伝える『公事方御定書』上下巻であるように見うけられます」とお伝えくださり、そればかりか先生の御論文の抜き刷り一冊をご同封くださいました。すぐに読み始めたのですが、如何せんその時の私はまだ論文の様式を読み進むことに慣れておらず、日本近世史や法制史の知識も圧倒的に欠如していたため、三〇頁ほどの一編を最後まで読みきるのに、

辞典を引き引き夜更けまでかかってしまいました。読み終えたものの残念ながら理解できたという実感は持てず、けれど「公事方御定書」ととりまく背景に対する好奇心は残りましたので、当該論文が収録された論文集を買って、頭から順番に読み始めてみました。難解ではあるものの、人と組織と社会の具体的な立ち居振る舞いに関してイメージしやすいものもあり、どうにか読み進めることができました。その中に含まれていた寛政期の物価引下令に関する論考を読み始めるに至って、なんといいですか、たいへん驚きました。それは寛政期の江戸石灰流通を例にとって江戸幕府の流通政策の実態を論じるといったような内容でした。恥ずかしながらこの時まで私は、侍が腰に刀を差して歩いていったような時代の日本にそんな活き活きした流通構造が確立していたなんて想像したこともなかったし、そしてなにより、現代を生きる人が二百年あまり前に蓄積されていたデータを活用して当時の経済動向についてこんなに精緻に再現できるものなのかと、すごくびっくりしました。もちろんその時点で内容を正確に理解できたわけではないですよ、学術的なことはわかりませんが、それでもあれを読んだ時なにか途轍もなく躍動する景色が向う側にあると直感して非常に惹きつけられました。二〇〇年

あまり前のデータが存在して精緻に考察されているという事実への驚き、そしてそのデータはいったいどこに眠っているのか？という問い。「史料」というものを初めて身近に強く意識した瞬間でした。この時を境に、目に映る市場の風景が大きく変わりました。

市沢 今までお話を伺ったようなかたちで、文書との距離がぐっと縮まって、お仕事をされるというキャリアは、業界の中では珍しいコースなのでしょう。みんながみんな、今、原さんが言われたような道ではなくて、もう最初からお仕事として割り切っておられるのでしょうか。
原 いや、私だって仕事ですよ。生活がかかっていますから、割り切れるところは割り切ろうと常に努力しています。

市沢 今お聞きしたような紆余曲折というのか、皆さん、こういうふうに進まれていくものなのですか。

原 こんなふうに右往左往してしまっただの、ひとつは私が初代だからです。

市沢 ああ、やっぱり跡を継ぐ人だと、そうじゃないやり方で仕事について学んでいくということですか。

原 たとえば何代かにわたり古典籍を扱ってられるお店の数々を拝察していると、跡を継がれる方たちには長い年月の間にご家業が築かれ

た看板への信用、お客様から寄せられた信頼と期待、膨大な在庫の運用管理等々を背負うご苦労とご努力は初代の我々には想像もつかないところがあります。既にそれぞれのお店が培ってきた専門分野の膨大な在庫が存在するわけですから、後継者はまずはそれらを正しく継承し、守り、次代に伝えることが期待されるでしょう。最初の頃は仕入れの際の本の見立てや相場は親から直接伝授されるようで、廻し入札の市場では面立ちのよく似た親子二人ずつ並んで着席されます。ですがなにより、幼い時分から店の品物を身近に感じながら、お父さんやお祖父さんの商いを身近に見て育った優位性は大きいと感じます。客観的に見て、スタート時点の古本屋としての基礎教養が私のような者と比べて段違いに優れていると感じますよ。でもまあ、どういう立派なお店にも初代開業の時代はあったわ



けでしょうから、うちはせいぜいうちの商いに精出して、お客様とのやりとりの中でいただいた気付きを無駄にせず、前だけを見て怠らず学び続けていくだけです。

「史料」を商う規範についての模索

松本 新しく業界に入っていかれた時に、内藤さんという方に会われて、最初の家文書を手がけられた時、収益というところに重きを置いておられたら、ばらして一冊ずつ売るという選択肢もあつたと思うのですが。そうすることのためらわれたのは、先ほどの古市先生の感性のお話とも関連するでしょうか。

原 そうですね、あのときはそうだったと思います。ですが、だからといってその後「一括で市場に現れた史料は必ず一括で扱う」と自らの中で単純化したわけではありません。業務的にはそう割り切ればスムーズなのですが、割り切れない事情があります。第一のケースは、古物流通の過程でまったく無関係の文書が混ざって混然一体となつているケースです。市場に一括と銘打って現れた家文書は、必ずしも出自を同じくする一体の文書群ではありません。矛盾がないことを確認するための全点通覧は必須の手順だと考えますし、実際にハッキリとした矛

盾があつた場合は注意深く精査してそれぞれの復元つまり分割を試みています。第二のケースは、家文書の中に貴重書籍（仮に物語絵本や和歌集断簡などをご想像ください）が紛れて残っている場合、これを史料とみるか書物とみるかという問題です。その家がそういう文物を所蔵したということに史料的な意味があることも理解しますが、本屋のはしぐれとしては、その家の家業と直接の関係がないかぎりこういう品物は書物として独立して送り出してあげたいと感じます。結局のところその史料とよくよく相談した上で決めるべきことですね。しかしまあ現実的には出品者の目だって節穴ではありませんから、そういうものは概ねあらかじめ選り出して一点で出品されており、私が悩むことが出来るケースはほとんどありません。

実のところ小店には二〇一八年頃まで「第三のケース」が存在しておりました。白状しますと、史料にとってはよろしくないケースです。主として武家の家文書を一括で仕入れた場合、その家固有の家職に関わる文書と記録は一括にまとめて目録に採り、藩政記録等の転写本についてはその家の旧蔵であることを述べた上で一点ずつ独立して目録採録していました。目録の何番から何番までがその家の旧蔵書かが明確になるように、時には冒頭で「〇〇家旧蔵書特集」

と銘打って掲載することもありました。目録上で旧蔵書群が一望できることがモラル上の要件だと捉えていました。地方文書を分割することにはあんなに抵抗があつたのに、武家文書ではなぜ平気でそういうことができたのか、不思議にお感じでしょうか。毎回古本屋の市場では武家や公家、神官等の職掌に関する転写本が単品で多数出品されており、品物によっては非常に高値取引されています。業界に馴染めば馴染むほどそれらについて「貴重書に類する品物」「埋もれさせず一点で独立して目録に採るべき品物」との認識を深めていき、当然のように分割し単品で採録するようになりました。「罪悪感なく……」と言いたいところですが、残念ながらそうではなかったように思われます。大仰なことは嫌いなくせに敢えて「〇〇家特集」と銘打って編集せずにはおられなかったのは、隠しきれない罪悪感の裏返しだったと、今はそのように感じています。

第三のケースをめぐる私自身の考えの甘さをハッキリと自覚するきっかけとなった史料がありまして、それは江戸某旗本家の文書だったのですが、同様の手法で分割して自家目録に採録したところ、何度かお目にかかったことのある学芸員さんがご連絡を下さり、「古本屋さんとしての方法論やお商売上のご事情があることは

理解しているつもりですが」と前置きされた上で、家文書に対するそうした分割行為が史料にとっていかに罪深い行為であるかについてゆつくりとお話いただきました。責める調子の一切ない暖かいお話しぶりに接しておなかの底から後悔と恥ずかしさを感じるとともに、一方で誤解を恐れずに申しますと、未来に向けて「封印を破り捨てた瞬間」のようななんともいえない清々しさを覚えました。その後も「家文書」というもののへの向き合い方に関してまたとない貴重な学びの機会をいただき、本当に感謝しています。

近世史料を手掛けることに关しては、随分迷いながらではありますが、商う上での規範や基準のようなものが私の中で少しずつ出来上がりつつあると感じます。でもそのように手探りで前に進むたび、古本屋の基本から徐々に逸脱していくようにも感じておりまして、時々ふと「いったい自分は本当に本屋なんだろうか？」という思いにかられます。劣等感といえますか、疎外感といえますか。

そうは言っても時には自分が「ああやはり古本屋だなあ」と実感する機会もありまして、たとえば先日NHKのドキュメンタリーで、お亡くなりになった立花隆さんが生前仕事部屋としてお使いになっていた「猫ビル」の本をご遺

言によりすべて処分されたという一幕があった、画面の中の清潔に片付いた空っぽの室内を見た私は「その古本屋は良質な仕事をしたんだなあ」と感嘆しました。在りし日の立花さんが集めておられた書籍群も映像に収められていて、この本たちは再び散り散りになってそれぞれがまた誰かのもとで読まれていくのだなあ」と感慨深く思いました。しかし番組は「立花さんの宇宙が（古物商のせい）で一夜にして消えてしまった（なんとという損失）」と概ねそんなふうな方針で編集されておりまして、個人的にはなんだかとても違和感を覚えました。本の寿命は意外と長くて、いろいろな人のもとを巡り巡って読まれていくのはとても健全なことではないでしょうか。だからこそ古本屋は呼ばれればできる限り駆けつけて買うし、買えば一生懸命売るんだと、普通にそう思いました。私は古本屋だから自然とそう感じたのだと思われませんが、みなさんはやはり、高名な知識人の書庫はやはりそのまま残すべきだとお考えですか？

市沢 いろいろ考え方はあると思います。バラしていいという考え方も、もちろん立つと思います。今、おっしゃったように、それがもう一回バラバラになって必要な人のところに行くというのがいい、という考え方もあります。

原 故人がそれを望んだなら、私たち古物商は精いっぱい仕事をやるまでだよと思ってその番組を観ました。「まず否定ありき」で語られたのはちょっとつらい。

市沢 少なくとも、故人が望むようにすべきだとは思いますが。故人がこれで「解散だ」と言っているのに解散させないというのは、ある種生き残った人の暴力ですよ、それは。自分だったら嫌だな、それは。

古市 古書の話ですとね、森鷗外の『渋江抽斎』っていう小説があるじゃないですか。あれで森鷗外らしき主人公が江戸時代の武鑑を集めるんですよ。武鑑を集めていくと、「弘前医官渋江氏蔵書記」っていう同じ蔵書印を押しているやつがあるなつて集めていくと、実は渋江抽斎が集めていた武鑑に行き当たつて。息子がばらすのかな、息子が売っちゃっているんだけど。それでも自分が渋江抽斎と同じ時代に会っていたら、多分趣味が同じで気が合っただろうみたいなことを書いているんですけど。だから本つてそういう生命力を持っていって流通していくつて考えれば、今みたいな立花さんの蔵書だつて、当然またそれを違う形で集めて、それこそ、おっしゃったような世界をつくるというか、そういうのに貢献するというのがありますよね。でも、難しいところですよ。

原 でもやはり、全点目録はとっておいてほしいですね。何があつたかという一覧は、散り散りになる前に。あくまで個人的な好奇心から見てみたいし。

古市 ええ。それこそ立花さんの世界が構成されるということですね。

原 ときとして「まつとうな古本屋」とか「古本屋の基本」の正しい定義なんてあるのかな？とも思います。だって扱い分野は店ごとに随分違って多岐にわたるし、業態も店舗販売、ネット販売、目録販売、仕入れ専門業者等々ほんとうに様々で、いろんな特技や前歴を持ったいろんなキャラクターの人たちが混ぜこぜで賑々しく市場にギュッと集まってきた、これ遠巻きに眺めたらたぶんカオスなんじゃないかな、と。組合の市場運営は同業者の協力協働で成り立っていますけど、市場って「競り市」だから当然日々本気で張り合う間柄でもあるわけです。競い合い和し合い、仲がいいんだか悪いんだかよくわからない。でも、たとえば私がいつも参加する東京古典会に集う本屋さんたちを見ていて、一点においてみなさん本当に共通しているなあと感じるの、品物に対して「おあずかりもの」という意識で接しておられる点です。落札して自店の在庫となつた品物は長い目で見ると「おあずかりもの」、そんな認識を暗黙のうちに共



有しておられるように感じます。手前味噌ですが、市会の経営員時代にそういう本屋さんたちを間近で眺めて素直に「カッコいいなあ」と思いました。自店の「おあずかりもの」をどのように扱うべきかという規範や規定は、本来それぞれのお店がそれぞれの歴史の中で固有に培ってこられたものではないか、とも感じます。

「近世史料」というジャンル

古市 モノとして資料を扱うということですが、れども。江戸時代とか明治以降の文書とかになると思うのですが、それこそ代々続いているような古書店だと、もうちょつと違うものを扱うというのか、それこそ多分物の格が決まっていますよね。

原 はい。

古市 お茶道具にかける軸であるとか、例えばね。古典籍でも、平安のものとか…。その中でいうと、格としては、江戸時代とか近代の資料というのは多分そんなに高くはないですね。

原 商品としての格についておっしゃっているんですね。

答えになっているかわかりませんが、そもそも同業者の間で「近世史料」なんていう分野呼称は通用していません。いいのか悪いのかわか

りませんが、うちの自家目録の標題をつけるにあたって私が勝手にそのように呼ぶことにしただけです。江戸時代の文書史料は、東京古典会が毎年秋に開催する古典籍展観大入札会にも毎回多数出品されますし、古典籍を扱う多くの有力店が扱っておられる分野なのですが、写本、版本、唐本、慶長以前の古文書、書画幅、地図、錦絵等々の他分野と比べると、たとえば使用される用語に関して、あるいは商品として扱うときの規範に於いても、業界内の一分野としてまだまだ未成熟なところを残しているように感じます。一分野を形成するに足る認識や評価が十分に共有されていない以上、そうした内向きの格付もまたこの分野にとって性急で無意味なものではないでしょうか。

戦前戦後から平成初めにかけて古文書を含む古典籍を精力的にお商いになり、今話題にされたような「商品としての格」を格段に引き上げた代表的功労者のお一人が弘文荘反町茂雄さんでした。反町さんは一九九一年にお亡くなりになりましたが、お弟子さんとして直接薫陶を受けた方々は今も現役で、古書業界の重鎮として私たち後進を折々暖かくご指導くださいます。そうした方々にお聞きしたところでは、反町さんの規定した古典籍ないし古文書の中に近世の文書は含まれなかったそうです。あるとき尊敬

する大先輩に「私が今扱っているような江戸時代の文書を古文書とは呼べないなら、（反町さんは）いったい何と呼んでいらしたんでしょうか？」とお尋ねしたところ、反町さんはそういうものは扱っておられませんでしたから名前はありません、（あなたが扱っているのは）名前のないものですよとお答えになり、たいへん衝撃を受けました。

古市 ああそうか。あの頃って、慶長以前と以後、江戸時代以後は多分そういう扱いをしていないですよ、きつと。

原 そうらしいです。いつまでたっても近世の文書ばかり扱っている私のことを随分心配してくださって、「あなたも努力してもつとよいものを扱うようにならないければ、よい本屋にはなれませんか」と折々励まして下さいました。ああそうか、私がつと頑張つて「よい店」にならないと、うちに来てくれる彼等（近世史料）までつまらないもののように見えてしまうんだ……といったまれない気分でした。それで私も一時期は（……という結構長いあいだ）かなり焦つて「中世文書も扱えるようにならないければ」「古写本も扱えるようにならないければ」と水面下で参考書らしきものを手あたり次第に読み散らしたり、そういうものを見に美術館や博物館にせつせと足を運んだりしていました。ですが

あるとき博物館で高山寺の紙背文書屏風を見る機会があつて、国立歴史民俗博物館の中世文書展の二回目（二〇一八年）ですが、あの会場のたしか最初のあたりの突き当りでその屏風に出くわして息をのみ、長い時間その前に突つ立って見入つてしまいました。ああたのいいああたのいいなあとうつとりしているうちに、だんだんと調べかけて置いてきた仕事のつづきを思い出してそわそわし始めてしまつて、帰路はスキップしたようなウキウキ気分でした。中世文書展の貴重な展示物に刺激を受けた結果なぜか「近世史料」へのモチベーションが高まつたという。二月の夕方京成佐倉駅のホームで電車を待ちながら「うちのまん中は近世史料なんだなあ」つてことがストンと腑に落ちました。

古市 そこで、私たちはそういうことをおやりにやっているということに関心を持つわけです



歴博「日本の中世文書」展(2018)

けれども。多分、いわゆる古書業界とか、古典籍の業界であると、多分違う価値観があるんだろうなと思って。

原 あるでしょうね。

古市 そこでやられることの、例えば気をつけておられることとか、やっていることに固有の意味を見出したりとかっていうお話があれば、何か伺いしたいと思ったのですが。「でもそれは違うぞっ」ていうふうに思っ、やっっておられるんですか。

原 いや、変わらないだろうなっと思う(笑)。

古市 変わらないんですか。

原 古本屋って本当にそれぞれいろいろなのでみんな違っ、てあたりまえといえますか。とはいえ私個人は「うちみたいのはまっとうな本屋の商いつていいないんじゃない?」なんて、しょっちゅう拗ねてシヨボくれます。脈々と続いてきた古本屋っていう生業集団に混じっ、ていて感じるわが身の無力感とか劣等感というか。まあでもそんなこと言っ、たつてはじまらないし、とにかくまずは目の前の史料をしっ、かり見て、うちはうちの仕事をするだけです。

古市 例えがいいかどうか全く分かりませんが、例えば東京国立博物館に行っ、て国宝とか重要文化財があるじゃないですか。それはそれもちろん展示してもらわなきゃ困ります。でも、

市立の博物館とかまちの資料館とかに行っ、てまちの歴史とか市の歴史みたいなことがちゃんと学べる資料—それは、指定品じゃないかもしれないけど、かけがえのないものですよ。そのまちの歴史を知るには。

「固有の意味」と言っ、たのはそういう意味で言っ、たつもりでした。そういう資料を扱うときに、「名前がつかないもの」であつてもそういう意味があるんだと言っ、たことを考えながらやっ、ておられるのかなと思っ、たので。

原 たえば仮に、あくまで仮の話ですが、古書業界の中で近世史料がみなさんおし、やるところの「格」の-highな品物だと認識されいと仮定して、「でもそれは違っ、ぞっ」ていうふうに私が思っ、たとしてですよ、「近世の文書は文化財ですよ、こっち側の勝手な格付けで彼等(文書)の存在価値を矮小化するのはいかなものか?」つて大声で訴え、たとしても、それはほとんど意味がない行為です。そんなことをし、たつて同業者には、いや同業者以外の方たちになっ、てきつとなにひとつ伝わるものはないでしょう。私は商人ですから、信念のようなものは商いとして体現してみせないかぎり伝わらないでしょう。ささやかな目標がありま、して、それは「近世史料目録」を、一〇〇号を越えてなお淡々と出し、続けていくことです。いまのそこ

ろ先月ので五一号目になりました。毎号あとから反省することばかり多い拙くてヘンテコな古書目録ですが、それでも、一〇〇号に届く頃には今よりきつと精度が高くておもしろい目録になっ、ていっていると思います。もしかするとその頃は時代や分野の違っ、本や紙類もどんどんどん扱っ、っているかもしれないけれど、どう変化していつ、たとしても小店が出すのは変わらず「近世史料目録」です。そりやもうたのしくて仕方ないわよつて風情のお婆ちゃんがニッコニコで市場に出てきては見知らぬ史料に出会っ、てよろこび、機嫌よく一〇X号の近世史料目録を出す頃にはきつと江戸時代の文書が「名前のないもの」なんて言われた時代は遙か遠い昔でしょう。私が考えているのは、そういうことです。

古書店営業の実際

松本 現在も、新規参入されてくる方はいらっ、しやるんですか。

原 いますいます、東京にも京都大阪にもたくさんいますよ。毎週火曜の古典籍の市場だけみても関西から毎週入札に来る新しい本屋さんが一人、また一人とここ数年で随分増えま、した。とりわけ人気のジャンルは中国関係の書籍か、さもなくば近世近代のいわゆる「書いたも

の」のように見受けられます。古本屋になる前からご自分がそういうものを好きで買い集めておられた人たちや、お身内が古本屋だという人たちもいらして、「新しい本屋さん」なんてお呼びするのが申し訳ないくらいいつかりした高札で落札していかれます。彼等の合同目録を目にする機会もあるのですが、みなさん書状、書画幅、短冊、草稿、写本、文書記録等々の標題と解題をバランスよくスマートに採録しておられて、写真の配置も美しく、なんというかもうすでに本屋として出来上がっているように見えます。ここまでめちゃくちゃ迷走してきた私としては彼等の賢さがまぶしくて、素直にすごいなあと感じます。賢い彼等の中から一人でも二人でもいいから江戸時代の文書と目が合って取り組んでくれる人が出てくれば心強いなあと思います。

松本 江戸時代の資料というのは、収益を考えるとなかなか手がけるのにためられる、そういうものですか。

原 江戸時代の資料でも版本や写本なら国書総目録などで基本的情報が共有されていますが、文書や記録を扱うためには基本的にまず自分で読んでみるしかありません。どこまで読むか、どこまでの情報を拾ってよしとするかは各本屋の考え方次第ですが、販売するために少なくと

もそういう作業が前提にあるということで、収益性というよりも、効率性が非常によくないと思われてしまうかもしれません。私自身を振り返ると最初の頃は崩し字を読み進めること自体にまず時間がかかったし、読んだら読んでわからない点はとにかく隅から隅まで律儀に調べ尽くそうとしましたから、時間がいくらあっても足りませんでした。古書即売会合同目録は入稿締切厳守なので、時間内ぎりぎりまで粘りに粘ってどの時点でスパッと割り切るか、締切り前は徹夜続きのチキンレースでした。彼等はスタート時点の私より何十倍も優秀なのであんなひどい状況にはならないでしょうが、どんなに優秀な彼等でもいざこれを正面から取り扱おうとすると、看過できない諸向きの疑問が底なしに湧いてくるでしょうし…。

松本 今、一冊の目録をつくられるまでにどれぐらいの作業をされているのでしょうか。

原 小店の場合、偶数月発行の年六回と決めています。けれどもお客様のご蔵書整理ですとか目録販売以外の仕事もその間に入りますから、目録作成に時間を割けない日が続いたりすると、結果的に年間五回の発行となることもしばしばです。年六回の心づもりで五回に着地するくらいがちょうどいいところかもしれません。目録発送後約三週間はほぼ営業に専念する日々にな

ります。お問合せに様々な形で回答したり、品物の見分にいらつしやるお客様を事務所にお迎えしたり、私のほうから研究室などにお伺いしたり、事務手続きや荷造り発送も並行して。慌ただしさが概ね一段落すると、印刷会社の担当さんと相談して概ね五週間後に入稿日を設定します。

松本 それまでに。

原 調べて解題を書いて、写真を撮って、全点揃ったら割り付ける。

一同 すごくですね（感嘆）。

原 編集ソフトを使用して完全版下のデータを入稿しますから、月曜に入稿するとその週の金曜に一斉発送することになります。目録についてはそんなかんじのスケジュールです。

一同（感嘆）

原 入稿直前に校正する段階になるともう頭がポロポロのクタクタに疲果ててしまつて、気を張ってやったつもりでも、毎回印刷があがってくると自分の校正の甘さ拙さに頭を抱えこんでしまいます。まあでもそれぞれの史料がいずこへか旅立てばこの目録の使命はそこで終わるわけだから、こんなだけどしどし勘弁を…と開き直るしかありません。すみません。

松本 私自身は、この目録をずっと置いておきたいなと思います。通常資料館であるとかそ

いうところに收藏されている資料を閲覧するときに、例えば資料目録というようなものが一冊あれば、いろいろなその時々に関心によって強く目にとまる資料って変わってきますから、送っていただいた目録を置いておいて、後々一年後、二年後とかに見ると、そのときは流し読みしていたのでも、こんな重要な資料が出ていたのかということは分かります。そういうことで送っていただいたこの目録は置いておくようにしているのですけど。

原 ありがとうございます。

「史料」のゆくえ

原 とここで、世の中には歴史資料のコレクターの方たちが所蔵管理されている史料群も存在すると思うのですが、そうした史料とみなさんの間にはなんらかの接点があるものでしょうか？ コレクターの方と会われることはありますか？

井上 美術品とかのコレクターはないですけど、地域の古文書をほとんどオークションで手に入れて持つておられるような方はいますね。

原 オークション。

市沢 ああ、そういう人はいますね。市民にも開かれた大学の古文書整理なんかをやってくる



人で、縁日などで自分が読めそうな字の古文書を選んで買っている方に会ったことがあります。家に古文書を入れる筆筒があると聞きました。

井上 私は割と地域に行くので、行くと結構地域の資料だからという理由で集めていらつしやる方とはお会いします。

ただ、その家の資料を見せてもらうかというのと、それは余りないです、あとは、郷土史家の方が亡くなられた後に、残された資料をどうしましょうといった相談を受けることはあります。そこに行くのと、地域資料がいっぱい残っていたりします。それは、特定の家の資料がまとまって残っているわけではなくて、余り大きな声では言えないけれど、借りてきてそのまま返さなままになっているというようなものもあります。

す。まだ、公に借りていけば記録をある程度とっているんで、返しようもあるんでしうけど。

原 はい。

井上 個人が集めてらつしやつたようなやつだと、地名をたどればどこから出てきたかを特定できる場合もありますが、今さらこれを返しに行つてどうするのつていうこともあります。そうなたら郷土史家の方の收藏資料として置いておくしかないというふうになりますね。私たちは、やつぱり資料の由来が分からないというのが怖いので。

市沢 ちよつと踏み込んだ話になるかもしれないですけど、原さんが仕事をされているゾーンというのは、机の上に古書とか古文書が並んでいる世界からスタートするのですよね。私たちとしては、そこへ運び込まれるまでのところ——今、井上さんが言われたような世界——は、

原 原さんや同業者の方々からすれば、それは職種の違い世界ということになるのでしょうか。

原 いいえ、そうではありません。「机の上に古書とか古文書が並んでいる世界」と「そこに運び込まれるまで」の世界はひと続きです。さきほど井上さんがおつしやつた「亡くなった郷土史家の方」が所蔵しておられた資料は、時間がかかりますが、その後いくつかの段階を経ておそらく私たちの古書市場に流れ着くことにな

ります。私も古本屋（あるいは小店が）そのお宅に呼ばれて直接その資料を買い取ることもありますし、古本屋以外の古物商が呼ばれることもあるでしょう。やがて古書市場に出現する郷土史家旧蔵資料のうち幾許かは小店が落札して扱うことになり、それぞれの資料を調べて内容や来歴を明らかにしたうえで販売します。古本屋は（あるいは小店は）買い取り業者にも販売業者にもなり得るのです。

また美術商、骨董商、古道具屋等々から買取専門の古物業者にいたるまで、あらゆる古物商と私たち古本屋とは間違いなくひとつながりの世界にいます。私たち古物商は様々な古物市場を介して品物をやりとりしています。どこかのお宅が売りに出した品物は、様々な種類の古物商を介して全国に点在する多様な古物市場を経由し、その品物が最も評価される（最も高値になる）市場に辿り着きます。旧蔵家から本や資料を最初に直接買った古物業者と、その品物を公共機関や研究者の方々に販売する古本屋の仕事は、持ち場こそ違いますが古物商として強く連携し、生業存続のため互いに依存する関係といえます。扱い品の異なる古物商間のこうした連携の歴史は少なくとも戦前より脈々と続いてきたものです。江戸時代の本屋仲間が古書売買に関して現代の古書組合と共通するような流通

網や商習慣を確立していたことを考えると、古物商間のネットワークもあるいは維新前から存在していたのかもしれない。異なる古物商の市場から古書市場へ品物を橋渡しするのはもちろん相互の業者ですが、たとえば古書業者の市場に他の市場から流れて来た品物が出品される時、その品物の出処は公開されません。そもそも古書組合の市場では入札業者に対して荷主（出品業者）はすべて原則非公開です。私も古本屋自身も、基本的に市場で仕入れた落札品の来歴については品物に残る様々な痕跡から類推するほかないのです。もちろん人が集まる市場ですから噂で荷主や流通ルートを知ることはあるのですが、それをお客様に詳らかに伝えることは（私どもの業界では）タブーです。ルールを無視したことが周知されると業界内の信用を失い、市場での売上に支障をきたすでしょう。つまるところ、先に申しましたとおり異なる古物商間には古くから強い連携関係が成立しているのですが、必ずしも互いの顔が見えているわけではないのです。

顔の見えにくい広域ネットワークには無論危険が潜むこともあります。警察署から盗品や偽造品の品触が廻ってくることもあり、稀に出品物の内からそうした品物が発見される場合があります。無論出品は差し止めです。市会も入札

書店も信用が何より大切ですから、品触がなくても怪しいと感じた品物には手を出しません。それは出品業者へのささやかな抗議の意思表示でもあります。

私自身が扱う分野に関して申しますと、たとえば市場では時々、各文書がその概要を鉛筆で丁寧に記載した分類封筒に収納されたままの姿で出品された家文書に出会いますが、こうした状態の文書に私は手を出しません。車で地方の山間部を流している押し買い業者の商いを連想して辛くなってしまうからです。実際にそうした業者の仲介によって流通に流れたのかどうか本当のところはわかりません。現役のそうした業者を知っているわけでもありません。それでも私がそのような商いを連想してしまうのは、地方の山間部で暮らした祖父が、古文書や甲冑を求めて予告なく庭先や土間まで乗り込んでくるそうした古物商のことを蛇蝎のごとく忌み嫌っていた記憶があるからです。

ですが、このところ時々考えこんでモヤモヤしているのですが、品触はなく、ざりとて市場で誰も手を出さなければ、ああした封筒付の文書はその後いつたいていどうなってしまうんでしょう？ 見たくないものを見ないでやりすごす書肆つづらやは本当にクリーンな古本屋といえるんでしょうかね？ そもそも、あのように丁寧

に内容を記載した封筒に収められた文書がそのままの姿で流通に流れて来る状況を、古本屋はどのように理解すればよいのでしょうか？ 封筒にコツコツ記載し続けた方々は、その文書の保存に関してどのような未来を目指していたのでしょうか？ 所蔵しておられた家の方々は、その文書に関してどのようなご希望があつたのでしょうか？ そうした文書に市場で遭遇してしまつた古本屋にできる最良のことはなんでしょうか？

一方で、お客さまから要望をいただければ、私たち古本屋はよろこんで蔵書整理に駆け付けます。つまり買い取りにおうかがいするという意味です。古本屋は店舗販売と同じくらい熱心に買い取りのご依頼にお応えします。東京に店舗があつて全国の買い取りに力を入れている古本屋は多いです。小店でさえお客様からときどき蔵書整理のご依頼を受けます。うちの店で扱わない向きの品物は組合の市場に出品し、そういう向きを得意にする同業者が落札して扱ってくれますから、安心してお受けできます。さきほどお話しした内容と矛盾するように思われるかもしれませんが、たとえば仮に小店にお声がけくださったお客様が、既に解体されたご実家でご先祖代々が保存してこられた文書の買い取りをご希望された場合、私はよろこんで駆け

付けますよ。ご家族のご意向をよく伺い、お話しがまとまれば査定をして買い取らせていただきます、然る後最も理想的な収蔵機関への販売納品を目指して尽力します。それが私の仕事ですから。でも、もしかすると私の祖父が嫌いぬいた押し買い業者の商いと書肆つづらやの商いは、みなさまが高いところから遠巻きにご覧になるぶんには紙一重に映るのかもしれませんがね。

市沢 そういうものなんですね。
原 そうなんです。

「史料」をめぐる様々なアクター

市沢 乗代雄介という人の『皆のあらばしり』っていう小説がありますよね。主人公は郷土史クラブの高校生なんですけど、古物、特に近世の書籍を発掘して高く売りつけることを仕事にしているすごく存在感のある男が登場する。

原 発掘っていうのはどうやって。

市沢 その小説の場合は、栃木の皆川というところのある旧家の蔵書目録を見たら、ほかで見られないような本があつたという設定です。それは、有名な文人に仮託して書かれた本で、ほかに類書がないから、男はそれをどうにか旧家から引き剥がしたいと思っている。それに郷土史クラブの高校生を加担させるという話です。



乗代雄介『皆のあらばしり』（新潮社）

高校生が「一体この本にどんな価値があるのか」と問うたら、男は「有名な文人が書いたものではないけれども、確かな地方の知識人が文人との関係の中でつくった本だ。こういうのが一旦市場に出たら、色をつける奴がいるんだ」と説明する場面があつたりします。

そういう私たちが興味をもっているような最前線のところには、私たちが知らない、この男のような人物がいるのかなと思いつつ読んでみてください。

原 「色をつける人がいるんだ」って言った人のことですか。

市沢 その男は、市場のことを熟知しているようなのですが、それだけではなくて、超博識な人物として登場するんです。もう自然のことから、地理のことから、歴史のことから、何から何まで知っていて、高校生が完全に魅入られて

しまうような人物なのですけど。その男が、一体どうしてそんな本が欲しいのかということが高校生に最後に告白するのです。その時に、有名な人じゃないがゆえにこの本に色をつける連中というのがいるのだと言うのです。

原 可笑しい、けど言い得て妙かも。

市沢 どういう経緯でこの小説が書かれたのかはわかりませんが、その男が得体の知れない人物として造形されていて、とても気になりました。今お話を聞いて、机の上に並ぶまでの世界というのは、いろいろあるのだらうなと思いました。

原 そうなんです。それで思い出しましたが、この間いただいた『JINK』のインタビューで、遺品整理をしている…。

古市 屋宜さんのお話ですね。

原 そうそう。拝読して「あ、そういえば」と思い出したことがあって。

移転前の品川区の事務所を管理していた不動産会社のご夫婦とは足掛け一六年のお付き合いで、二年に一度更新のタイミングで目にかかってお茶をいただきながら長話するのが恒例になっていたのですが、いよいよ移転間近となってお目にかかった日に、「古い家を取り壊して跡地に新築を建てる時なんか古い紙類を目にすることがあってね、なにしろもう長い

こと原さんのお仕事の話を聞いてきたものだから、ひよつとしたらこれは報せて相談したほうがいいのかなと思うことが時々あるんだよ。原さんはいつも市場市場というけど、古文書だつて最初から市場できれいに並んでたわけではないでしょうよ。古いもののおかげで生活させてもらっているんだから、行き場を失った古文書のために自分からそういう現場に出かけて来るのもあなたの仕事なんじゃないの？」と言われました。いろいろ考えるきっかけになった言葉でした。

古市 すごい不動産屋さんですね。

原 そのことを思い返しながら屋宜さんのインタビュー記事を読みました。古書業者を呼んだけど、ほんの何点かしが買い取ってもらえなかったとお書きになっていて、「業者が違えばそうではなかったかもしれないのに、不運な出会いだったんだろうなあ…」とちよつと残念に思いました。

市沢 『皆のあらばしり』もそうなのですけど、現場において敵対的な関係になってしまうケースっていうのは、ないわけではないと思うんです。歴史をやるほうと、それを扱う方とで…。だけど、今のお話も自分ではすぐ腑に落ちるところがあって、いろいろな関心を持つ人がお互い潰し合わないほうが、文書が助かる確率は

高いと個人的には思っています。「隣人」っていう言い方はこちら側からの一方的な呼び方で失礼かもしれないけど、そういう人たちと話をしたり現場の状況をシェアしたりしたいと思うのは、そういうところからなんですけどね。

いろいろな関心の持ち方があって、一概に一つだけ正しくてあとは全部間違っているとかなかなか言えるものでもなくて。お互いがお互いの関心を知っていて、自分は手を出せないけど、こつちの人はひよつとしたら手を出してくれるかもしれないというような、そういう関係であるほうが、結果的には文書は残る可能性が高いと考えています。

原 先日今回の件について電話でお話をさせていただいたとき、「古本屋が史料に値段をつけるということに抵抗があまりではないですか？」と私がお聞きした時、それよりもむしろ、災害のあとに被災地に入ったら、古物商が史料などを買い取った後だったというような出来事などが、研究者と業者との関係を考える上で重い問題です、というようなお答えでしたね。

市沢 私は実際にそういう場に出くわしたわけではないです。でも、そういう業界の人と競争になるだろうという話は聞いたりします。

原 競争というのは。

市沢 競争というか、どちらも文書が必要な対

象として見ていて。文書が何方に行くのかをめぐり競争…。

原 古本屋とすればそこで競争とおっしゃられてもピンとこない、違う気がするな。

井上 災害のときなんかで私たちの界限で言われるのが、被災地に入るのが遅くなると。業者が入ってきて、先に入って蔵ごと一棟買い取って。資料を助けにいったときには、もう資料が残っていないという状況があるという話はよくされていますね。

市沢 ああ、そういう感じです。

井上 私は、実際には経験していないのであれですけど。何かそういう話がやっぱり私たちと業者さんとのイメージ、敵じゃないですけど、競争する（ような関係）。

原 なるほど現場でそういうことが実際に起きたのですね。競争とおっしゃる意味も理解できました。そうですね。

「史料」の来歴

松本 史料がどこから出てくるかというお話の中で、個人の家に伝わった史料——例えば民間所在史料と呼ばれる町方や村方の文書——は大体のイメージがつきますが、つづらやさんが扱われている史料には一定のまとまりを持つ幕府

や藩の職掌記録が少なくないと思います。それはまた個人の家の蔵などとは違うところから出てくるのでしょうか。

原 具体的に蔵を想像したことはありませんでしたが、しかしかつてその役所に勤めていた人の家に残って伝えられたものであったと思われる。当時の役人は先例を熟知していることが重要でしたから、自分の職掌に於いて必要になって写したり記録したりした留帳などは、いつか子孫がその御役に就いた時のために大切に保管されることが多かったようですね。うちで扱っているそのような職掌記録類は、庄屋文書など同様、それぞれの家に付いた資料の中から時を経て古書市場に流れ着いたものです。ご記憶に新しい奏者番の記録は二重箱付の一組物として市場に出品されたものでしたが、そのほかの幕府役人の記録類でこれまで扱ってきたものは全て概ね一冊一点ずつ断続的に市場に現れたもので、それを買集めて復元を試みたものでした。「家」から直接出て来たものもあるでしょうが、おそらく大半は、ひと昔前に一群で出てきたものがバラバラに買われた後、世代が二廻りしてまた同じような時期に市場に集まってきたものだなと感じました。いずれにせよ、ご事情により「家」から放出され、紆余曲折の果てに古物流通を経て小店に辿り着いた品物をよく

見てその伝来の糸口を見出すのが私の仕事です。いつどこで、どういう社会属性の誰が、何のためにどのような手法で何事を書き記し、それがどのように残されたか、そういう基本事項を可能な限りご紹介するのが史料を販売する古書目録だと考えます。そうではあるのですが、蔵を出てから古書市場に流れ着くまでの古物流通ルートを確認に把握することは、如何せん多くの場合私どもにとっても非常に困難なことです。また念のため申し上げると、お買い上げになった品物が市場に現れた際の荷主（市場への出品者）をお客様に明かさないのが古書業界のルールです。

松本 一つ一つの資料に、やっぱり人々の思いが染みついているというか…。お話を伺っていると。

原 そうですね。おうちの中で、お祖父さんからお父さんへ、お父さんから息子さんへと伝えられた職掌記録ですから、代々それぞれが書き入れた注釈の言葉のうち明らかに子や孫に向けた調子の文言を見つけると、キュンとします。

『近世史料目録』に至るまで

松本 原さんがご商売を始められて、現在のスタイルの目録ができたのは、おおよそ東日本大

震災の前後でしょうか。

原 自家目録を最初に発行したのが震災の前の秋でした。二号の入稿は震災の三日後でしたから、そういうことになるでしょうか。でもその頃の目録のスタイルは今とは少し違っていたように思います。最初はしばらく三段組でした。

松本 自家目録っていうんですか。

原 はい、同業者間ではそんなふうに通称されることが多いです。複数の店が自店の品物を採録した原稿を持ち寄って作った合同目録ではなく、自分の家(店)単体で発行する目録という意味でしょうか。

松本 なるほど。それで、机の上に並んでいた物をだんだんとご商売として扱われていつてそれで、外も見えないといけない、という不動産屋さんのアドバイスが…。

原 二〇一九年ですね。

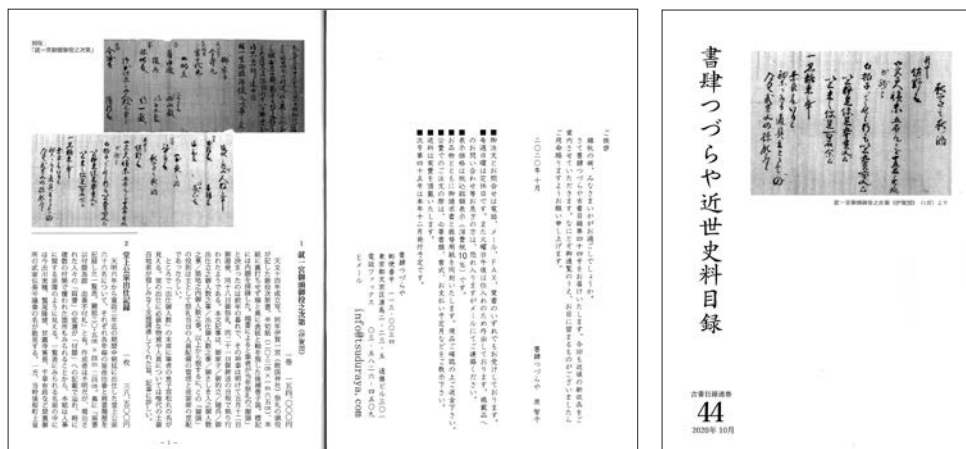
松本 そのあたりで、この自家目録のタイトルが『新収書目』から『近世史料』に統一されてくると思うのですが。

原 きっかけはたいしたことじゃないんです。一号目録から一七号目録まではすべて新収品のみを収録した目録で、売れずに残った品物は再掲載することなく我慢して貯めていました。ちなみに当時小店の新収品目録のタイトルは「書

肆つづらや新収書目」で、「近世」も「史料」

も謳ってはいません。まだ限定するつもりがなかったからです。二〇一五年の暮れ、満を持してとうとう在庫全点目録を発行し、ひとまずこれを「近世史料目録」と名付けました。我慢の甲斐あって通常号よりかなり厚みが出て、はじめて中綴じではなくくるみ綴じの古書目録が出来上がってうれしかったです。以来毎年一回年末に全点在庫を掲載した「近世史料目録」を出すようになりました。ある程度想像はしていたもの予想以上に一気に総点数が減っていきまして、遠からず「近世史料目録」と「新収書目」の見た目のボリュームが変わらなくなってしまうことは必定。どうやら古本屋にとつて点数が少なくて薄い全点在庫目録というのはダメな本屋の標本みたいなものらしくて、そうか、さすがにまずいんだろなああと考えた末、それならいつそのこと両方とも同じタイトルにしちゃえ!と、そういう安直な思いつきがきっかけです。そんなわけで、二〇二〇年二月コロナ禍直前に出した通常号をはじめ「近世史料目録」と銘打ちました。もはや小店の新収品について「近世」とか「史料」と謳うことになんの躊躇いもありませんでしたから。むしろ積極的に唱えていくとすら…。

一同 ああ。



『書肆つづらや近世史料目録』(表紙(右)と冒頭部分)

松本 「近世史料」というふうに呼びならわしている古書店さんは…。

原 いないと思います。たぶんこの呼称はどうかの間違っていて滑稽なのかもしれませんね。そもそもの悪いのか自信がないまま私が勝手に名付けたのをそのまま使い続けている次第です。こういう名称はこうだから誤っている、というのが妥当だというのがありましたら、ぜひ正してください。すぐにも改めたいと思います。

ネット販売・オークション

松本 一五年間お仕事をされてきた中で、変化したことはありますか。原さんのお気持ちとして変わったと思われることや、古書業界の推移に絡めていただいても結構です。合わせて、今後のお仕事の方向性について思い描いていらつしやることについても伺いたいと思います。

原 それは古書販売の変化でしょうか？ 例えばヤフオク、メルカリなどのネットオークションを主たる売場にする業者が急増してきたこととか。

松本 そうですね。御商売のあり方自体がもう大きく変化していると思うのですけど。

原 ネットオークションを主たる売り場としてお商売される古本屋は、ちょうど私が開業した頃から急速に増えてきました。それより少し前にはAmazonサイトで販売する書店さんが目立っていました。最近ではネット販売といえどオークションサイトを連想しますし、販売サイトとしては（手前味噌ですが）東京組合が運営している日本の古本屋サイトが急速に伸びていると感じます。ネットオークションを活用して販売するのは無店舗の初代開業店だけではなく、既存店も店舗販売と並行して取り組んでおられるところが増えていくようです。

市沢 ヤフーなどのオークションに古文書が出ていますよね。あそこで資料を売っている人というのは、自分がたまたま、どこかで見つけたものを適当な値段で出しているのですか。それとも、オークションに出すためにものを集めて、出品する人がいるのでしょうか。私たちの側からは全然よく分からないのですが。

原 両方いるのではないのでしょうか。古書組合員の中にはヤフオクなどのネットオークションへの出品にほぼ専業している古本屋も昨今たくさんいます。しかしオークションサイトを開いて出品状況を眺めていると、個人的な見解で恐縮ですが、古本屋らしからぬ手法で出品している業者も多くみられます。様々な古物商、様々な

なコレクター、様々な立場の素人さんが入り混じって出品しているのではないのでしょうか？

親しい同業者に「どんな人が落札するの？」と尋ねると、存外海外のお客様も多いようです。そういえば、先ほどお話しした文学堂書店の内藤さんはご高齢でも好奇心が旺盛な方でしたから、よく「あなたね、そんなに生真面目に要領悪くやっていたらいつまでたつても楽にならないよ。ヤフーオークションをおやんなさい。どうやらあなたはよさそうだよ」っておっしゃって。

一同（感嘆、笑）。

原 二〇一〇年くらいでしたか、アカウントを作って試しに出品してみました。江戸時代の古い版本などを。すると、和洋会古書展にそういう本を出したら度々注文を下さる方がヤフオクでも落札されました。商売の過程がなんとなく性に合わないの、自然とやらなくなりました。

松本 オークションをしている人の方からは、どんな人が買っていくとか、顔はある程度見えるんですか。

原 少なくとも送り先のお名前とご住所はわかります。実際にどういう人かは、たとえば何かめんどろが起きたときにはハッキリ見えるでしょうね。

一同（笑）

松本 これから先ですけど、こういう目録を送っていただいて、それを見てこれを買いたいということでも資料が残っていくこともあるでしょうし、オークションで競り落とされて、資料が残ることもあると思うんですけど。物をお預かりして次の人に渡していくという意識で商売されているつづらやさんとオークションでは、なかなか合わないようなことになっていくと思うのですが。

原 私自身の個人的な考えとしては、たとえば江戸時代の家文書のような史料をネットオークションで扱うことに対して抵抗があります。ひとまとまりのものを一点ずつバラバラと連続して出品されているのは問題外ですが、一括で出品されていたとしてもオークションに出品されている以上、一定期間内に最も高値を付けることが出来た匿名の人物が自動的に獲得するわけで、そのことがその史料にとってその時点で最善の結論かどうか皆目見当もつかないまま手渡す商いというのは、私にはどうしても抵抗があります。出品業者にとってネットオークションの長所のひとつは、世界中の不特定多数の広い層に商品情報を拡散することが出来ることで、品物の隠れた価値を知る彼等が競り合って価格を吊り上げてくれることも期待できるでしょう。しかし江戸時代の家文書を売る場合、現実

的にはどういった所（あるいは人）にお引き受けただければその史料が幸せになれるかとあれこれ考えを巡らし、手渡したい対象をある程度想定した上で目録を書くことに慣れた私には、ネットオークションのそうした長所は仇にもなり得ると感じてしまいます。ネットオークションに関するこのモヤモヤを幾分かでも解消するため私に出来ることは限られていて、それは市場で目が合う文書群に出くわしたらオークションに出品しそうな業者たちにはなにがなんでも競り勝つことです。ここ（市場）にいる全員の中でその史料を一番誠実に扱うのは自分だという強い思い込みと、渡してしまるかという覇気。必要なのはそれですかね。

とはいえネットオークションそのものを否定しているわけではないのですよ。だって、たとえば仮に専門分野とかけ離れた、よく知らないけれど「なんだかおもしろそうなもの」（たとえば額装されていないけれど只者ならざる風情の油彩画群などをご想像ください）を思いがけず仕入れる機会があれば、真つ先に私の脳裏をよぎるのは間違いないオークションです。ネットでもいいしリアルでもいい。そういう機会を夢想することはよくあります。

経営員時代を共にしたことで今も親しくしている業者の中にもネットオークション専門の人

が何人かいます。その中の一人が最近小さな店舗（小店同様、閉架の事務所かな）を構えたようです。ヤフオクで度々落札してくれるお客さまとそれなりの関係性ができて、自分にとって得意な分野で少しずつ直接販売をはじめたところ、そういうのはこびとったようです。思えば私も外売り専門業者として商売をはじめて、いつのまにか目録販売業者に転じています。古本屋はいろいろですが基本は品物に対する態度ですから、業態にかかわらずわかり合える部分は少なくないです。

松本 ネットオークションのことも結構なんですけど、原さん御自身でもつとこうしたいんだけれどもうまくいかないな、と感じておられることはありますか。

原（間） 一貫してずっと思っているのは、もう一つ体があつたらずつと参考書を読ませておきたいという…。

一同（笑）

原 本心に勉強が間に合っていないという実感の中でずつとやっているの。その時に扱っている史料のためはもちろんですが、この先扱うことになるまだ見ぬ史料への備えとしても常に手を抜かず調べているつもりではあります。でもそのときは「よっしゃ、ここまではわかったぞ」と満足しても、二ヶ月経つとそれが気のせ

ிட்டしたこと気付かざるを得ないし。もうずっとそういうことの繰り返しです。全然息がつかないなあ、しばらく安住できるような踊り場にさえ辿り着かないなあと始終嘆いています。書肆つづらやは今生では出来上がらないんだって、だんだん諦めがついてきました。

松本 二生分ぐらい要るかなという感じ。

原 そうですね。だけど便利になってうれしいなと思うこともあります。私にとってありがたい環境の変化は、いろいろな機関が収蔵している典籍をネット上で公開して閲覧させていたいただけるようになったことでしょうか。コロナ禍で図書館に通えなくなった期間にはそのことに随分と助けられました。

コロナ禍と古書店

松本 ほかにコロナ禍による変化は感じておられますか。

原 二〇二〇年の春、近所の大学から人影がほとんど消えて、いつも利用している図書館も長期閉館に近い形になり、博物館の催しも軒並み中止、どの機関の事務課も通勤制限で人が少なくなっているのを肌で感じ、そうこうするうちに自分たちの古書市場も続けられず休会になってしまつて。いつ明けるともしれない閉塞感の

中、もしかしたらこれまで少しずつ築いてきたうちの商売は向こう一年、二年、成立しなくなるんじゃないかと覚悟して、扱い分野と販売方法の一時的な変更を視野に入れました。ともあれまずはそれまでに扱いきれず溜まりに溜まっていた未着手品を平時よりもじつくりと腰を据えて調べ、まるで暗闇と自分を隔てるドアを恐々ノックするような気持ちで定期的に発行発送し続けました。幸か不幸か扱い分野の転換に踏み切ることなくどうにか今日に至りましたが、商売を見つめ直す機会になりました。古物を取りまく環境も、小店の商いも、コロナ禍の影響で本当に変わっていくのはこれからだと感じています。

井上 コロナ禍の影響で古文書の流通量が増えたとか、そういうことはなかったのですか。

原 今日までのいくつかの段階でそうなるんじゃないかと予想して身構えたのですが、ここまでは増えもしないし、減りもしなかったです。でも普通の本は、それはもうめっちゃめっちゃ増えました。殊に月曜の一般書の市場はずっと大変な出品量だと聞きます。

古市 みんなが売ったつていうことですか。

原 そのようです。

井上 コロナ断捨離つていうことで。

原 そうでしょうね。



井上 私たちの中では、それで家の蔵とかを整理して歴史資料が売られるのではないかという話が結構あります。

これからのこと

松本 一言では語りつくせないとは思いますが、今後も近世史料を中心としてお仕事を続けたいというお考えでいらつしやるんですか。

原 そうであればいいなと思っています。そもそもの始まりが「目が合つて…」という感覚的な出会いでしたが、その感じは今もまったく変わっていません。いつまでも彼等と目を合わせる事ができる自分でありたいし、目が合った彼等に対してしっかりと責任をとることが出来る強い商人でありたいと思います。

松本 定年とかはないわけですね。この世界は。

原 はい。そうです。八〇代で現役の本屋さんには珍しくなく、品物と市場を知り尽くした最も手強い存在です。何度か話題にさせていただいた文学堂書店の内藤さんは来月もう三回忌になるんですけど、亡くなる直前まで長期間にわたつてお店の在庫を市場に出品し続けて、とうとう完了して店終いした数ヶ月後に亡くなられ

ました。それから、和洋会古書展でお世話になった金文堂書店さんは、お亡くなりになった日の翌週、生前最後にお書きになった目録が小店にも届きました。お亡くなりになる間際まで現役の古本屋でいらした方々を何人もお見送りしてきました。

松本 お話を聞いていて、個人的な感想で申し訳ないのですが、ビジネスや商売の世界というより、何か芸能の世界というか…。

原 いやいや、そんなことはありません、商売です。職人的な要素はあるかもしれませんが。

松本 例えば、原さんがお商売を始められたときに、内藤さんからいろいろなことを聞かれたように、今、新しく入つてこられる人に原さんが伝えていかれることあるのではないのでしょうか。

原 まだそんな力はありません。小店自体が全然出来上がっていませんから。でも、さきほどお話したように昨今新しい人たちがたくさん参入していて、とても賢くてスマートな彼等は同業者として希望の光みみたいな存在です。私ももつとしっかりとしゃべらなくちゃ！と、すごい刺激をもらっています。願わくば彼等の中の一人でも二人でも江戸時代の文書史料と目が合つて、真つ向から取り組まれるようになっていったら頼もしいなあと思います。

とてもおこがましいのですが、私自身がこの分野を扱ってきつづく難しい（しんどい）と感じているのは、史料が「どうしたら売れるか」を考えることではなく、目が合った史料を「どのように売るか」を考え続けて迷いながら決断し続けることです。賢い彼等も本気で扱えば扱うほど、おそろくすぐにこの問題に直面することになると思います。その時には、もし受け入れていただけるなら私が経験してきた失敗の数々を残らず全部伝えて差し上げたいと思います。競い合いながら、迷いを共有しながらともに道を固めて行く仲間になれば最高に心強いですから。

松本 くずし字の勉強会も継続されているのですか。

原 いやあ、じつはそれはわりと早い時期に、まだ十分には読めていなかった段階で早々に脱落してしまいました。たしか二年間ほどはまじめに通つたと思うのですが、毎週夜時間に出かけていくことがだんだんと億劫になつてしまつて：怠け者で面目ない。みなさんは今もずっと続けておられますよ。

「隣人」とは

松本 今日、原さんからお話を伺うまでは、古

書業界に対して閉鎖的な印象を持っていたのですが、認識が改まりました。さらにお店とお客さんとの関係でお伺いします。例えば、つづらやさんから資料を購入したということがあった場合、買った・売ったで関係が終わるものではなくて、お店とお客さんとの間で対話を継続していくことが必要なのかなと思ったのですが、お客さんに対して、もつとこういうふうにしてほしいというようなことはありませんか。

原 うちが今までこの分野を扱い続けてこられたのはお客様がたがご注文を下さったおかげです。一件一件のご注文に支えられ励まされながら、いつも前向きな気持ちで次の史料を仕入れることができました。感謝の気持ちはとても一言で表現できません。同時に、目録を毎号御覧になって下さる方々もまた小店にとって大切なお客様です。私は本当にお客様に恵まれてきました。目録に露見する私の不明についてその都度ご助言をくださったたり、あるいは私自身まだ十分に自覚できていなかったような迷いを敏感に察知して声をかけて下さり、またときには歯に衣着せずご叱責下さったお客様たちのおかげで、私は今も史料と目が合う古本屋で居続けることができております。「わからない」ということを肯定的に捉えられるようになりました。これからもかわらずご指導いただけること

を切に願っています。

それから、まだ古本屋に馴染みがないというお若い学生さんたちには、ぜひ一度「これは」と思う古本屋を直接訪ねてみてほしいです。お客様とのなにげない会話の中でふと得た気付きに引き寄せられて、それが自然と棚や目録に反映していくのが古本屋です。私たちとの無駄話に興じて下されば、いつか必ずお役に立てると思います。

ところで、今さらですが「隣人」って何ですか？ みなさんにとつて私は「隣人」なのでしょうか？

市沢 お付き合いはあるのだけど、壁があるから隣人なので。何をしているか直接は見えない。だけど、以前も書きましたけど、これから理解し合っていきたいなと思っています。せつかくお隣にいるのだから。

原 でもわだかまりがあるわけですよね？ だからこそこうしてお呼びくださった。

市沢 うーん。私の場合、直接現場で対立するようなことは体験していません。今日、原さんのお仕事ぶりや職業倫理とか職業意識とかをお聞きして、知らないことはいっぱいあるし、もつと知り合わないといけないと思いました。

原 ありがとうございます。

市沢 自分のイメージや風聞だけで、「あの仕

事はああだ」みたいな割り切り方は絶対したらいけないなと思います。それは他の方のお話を伺った時もそうでした。『LINK』の前身で「家送り（贈り）」のお話を聞く前も、これは文化財破壊じゃないのかみたいなことを、心の半分では思っていました。でも、実際の活動についてお話を伺って、私たちとはまた違う立場で地域やまちを大切にしている活動をしているということが分かりました。私たちもこれまでとは違う形で協力できることがあるのではないかとあるいは、困ったときに助けてもらえるんじゃないかみたいなことも考えました。だから、そういうところでもより分かり合えたらいいなと思います。私はそう思いました。今日、お話を聞けてよかったです。

原 ぜひ、大阪や神戸の古本屋さんたちともお話をしてみてください。

松本 いつまでもお話を伺いたいところですが、そろそろこのあたりで。どうもありがとうございます。

市沢 これからもよろしく願っています。懲りずにまた、いろいろと教えてください。

一同 どうも長時間ありがとうございました。